



71
489



始



71-4891



海山全集

才九子

正

10. 6. 30

購求



目次

- 一 男 山……………一
- 一 男 山 後編……………一四
- 一 男 一 疋……………二五七
- 一 高倉長右衛門……………三七四
- 一 高倉長右衛門 後編……………五〇六

浪六全集

第九編

浪六著

男山

神は慈悲圓滿にして無縁の民を生ぜず、されば分相應、稼ぐに追付く貧乏神なしといへど、

またいたづら神の悪洒落に咬かされて、かせぐに追抜く貧乏神もある世の中、つまり運とい

ふ奴が自體の分らぬ曲者なり、

葉末の露と蟲の音の歌枕、草より草に入りしといふ月の名所の武藏野も、幾年を経て世の盛

衰に伴ふ桑田碧海の諺、今は軒より出でて軒に隠ると江戸繁昌のころ、血腥き風は魚河岸

男山

に餘波を止め戦闘は昔老爺の夢物語りとなりて、只こよに名ばかり残る鎧の渡船場に添ひし茅場町に建聯ねたる磨き庫の角屋敷を構へつよ、深川の木場に身代の半以上を積上げて、木曾名産の檜一切を一手に賣捌く材木問屋あり、誰知らぬものなき其名を柏木傳右衛門といふ、茅場町といへば檜木問屋と答へ、木曾の檜木問屋といへば柏木傳右衛門といふ、その頃の勢ひ江戸七人の分限者に數へられて、神社佛閣の建立は固より大名高家の普請に至るまで、およそ人目を驚かすほどの建場には丁々たる斧の音と共に傳右衛門の名の響き渡らぬ限もなく、檜材木に打つたる丸に柏の焼印は取も直さず其まよに搖錢木と羨まれて、いよく行末の繁昌を壽く大黒柱いつまで動かぬ全盛を江戸中に唄はれぬ、身分こそ町人なれ、名こそ材木屋なれ、こよに今四代目の主人傳右衛門は物の冥加を知らぬ僭上無類の男、おのれ獨りが黄金の中より生れいでたる鼻たかくと蠢かして、日夜を酒色

に耽り身を遊藝的に投じつよ、宛から國持大名の華奢に等しく、世間しらすの我まよに育ちて憂しといふ浮世の風どこを吹くかと怪しみながら、三十二の曉に及べども家格相應に定まる妻は興もなく面白からずとて、其ころ江戸市中に聞えたる美人を小判の光輝に奪うて七人の妾を抱へ、その七人を赤坂の澁谷、麻布の目黒、鐵砲洲の濱邊、本所の豎川、隅田川の梅若、千住の川添、王子の田端、以上七箇所の數寄を極めたる寮に別ち置いて、通ふ道には定抱への駕人足を飛ばし川筋には家形舟を漕いで立廻りつよ、夜は寝るに唐織の吊夜具を用ひて臺所にも蠟燭の外は一切の油火を禁じ、野がけ花見の頃は青竹の幕串に寄物の道具を誇り、戀の水上といふ女色の吉原、情の極意といふ男色の堺町にも飽果てし後は、十三より十五までの晝ける如き美なる少女を選んで落花狼藉の振舞、あはれ七日目毎に新しく取替引代て無理往生の泣音を慰めし體、いかに金が敵の世なればとて、きくもの思はず拳を握ッて地圖太

を踏みぬ、

浮世の苦樂は壁一重、落つる涙と笑ふ聲とは僅か二寸に足らぬ鼻柱を隔てしのみ事、されば柏木傳右衛門が吹下す黄金の山の勢ひに任して罪も報いも疝氣もあるものかと日夜に狂ふ華奢全盛の下には、あはれ生れながらの牛馬に等しく丸裸の五體に膏汗を流して苦しき息も絶えんぐに材木の荷車を曳きつゝ年が年中の飢に叫ぶもの幾百人、中にも柏木が常備ひの車力ばかり五十餘人ありて、近來めし抱へられたる喜助といへるは四十二の厄年、龜島町の裏長屋九尺二間の棟割小屋に住んで、夫婦の中に今年十四の戌松を子寶といふの外、絞れば鼻血も満足に出かぬるほどの瘦身代、おのれやれと夜を日について一生懸命、稼げどもく何とせむ、かせぐに追抜く足早の貧乏神奴が、見返りながら澁團扇もて我を招くに等しき無念心外、しかも車力仲間の新參者として、荷は軽く道は近くて賃錢の多きを人に奪はれ、荷は重く

路は遠くて賃錢の薄きを押附けらるゝ悲しさは、人一倍の力癩を出せど鏝一文の甲斐もなく、さても不運の我には、めぐる因果の小車と諦めて、たゞ浮世を渡る揖棒こればかりと取纏りながら、やうく其日を泣きの涙に送りぬ、

稼げどもく足早の貧乏神に追抜かれて喘ぎながら驅行く車力の喜助が生涯の賃錢を喰はず飲まずに積上ぐればとて、生れながら福の神に取巻かれたる柏木傳右衛門が半日の雑用にだも及ばず、とかく浮世は力業より智慧才覺、その智慧才覺よりも持て生れし運次第、あれでも人間のうちかと傳右衛門が笑へば、せめて七箇所の寮を照す一夜の蠟燭代が欲しいとて喜助が泣きぬ、

壽き祝ふ龜島町に住んで浮世の萬事を喜助といへばどこから讀でも考へても目出たい文字の

名詮自稱しかも太平無事の江戸繁昌に水入らずの親子たゞ三人、油断なく働いて其日を喰兼ぬる筈はなけれど、貧乏神の氏子と生れつゝいたる悲しさには祈らずとも守らせ玉ふ靈現ありより顯著にして、嘗さへ年が年中の泣面に今年は別けて四十二の厄年あゝこの上は何とせむせめて生命ばかりを助け玉へと念じぬ、

草は葉を巻いて流るゝ水も湯に沸くといふ夏の炎天を、横町の魚屋に賣残りたる蛸の足一本さへ得喰はぬ總身より終日の膏汗絞りて、やうく其日の夕暮に歸り來りし喜助、うき世の貧に責拔かれたる上を幾年の雨に打たれ風に揉まれ此ごろの日に曝されて、白きは目と齒ばかり一入に光りて物凄く、肉を突いて現はれたる五體の骨節ぬつと高く、まッ黒に瘦枯れたる體、へたの墨繪に描ける干乾の羅漢に似たり、

されど連添ふ妻あり血を分けし生みの子もあり、月に二匁の家賃を拂ひかねたる九尺二間の

裏長屋なれど、廣い世界に歸るべきは此處ばかり住めば我家と、禪に括りつけたる今日の身の膏、一さしの錢を門口に握ッて入れれば、ことし三十八の女房が内職の手仕事を止めて迎へ出る背後より、父を待わび母を扶けて近所隣屋の町小使に追使はるゝ十四の戌松、親子三人おもはず顔見合せて喜ぶ利那の一瞬が乾き切つたる生命の露なり、

「や、草臥れたく、十日ばかり照續いた乾蒸で今日といふ今日が今年の夏の劍の峯、しかも近頃ねエ重荷で車力に禁物の山の手を曳上げた時の苦しさ、目が眩んで頭の盆の窪から腹の底まで鐵火箸を突ッ込まれたやうに思ツたが、ハ、ハ、ハ、まづ生命だけを無事に拾ッて歸ツた、さア水でも浴びて、何、湯を沸かして置いた、そりやア有難い蘇生るわ、嘸もア酷かつたでしやう、家の内に坐ッて居てさへ今日は格別まるで煎られるやうに思ひましたもの、こんな時は蔭で樂をしては濟まないと妾も一生懸命、手仕事に氣を取られてうツかり日の

男 山

暮れるも知らずに居ましたところがあの戌松が御近所の使者賃に貰った錢で、良人、お酒を二合と干物を買って来てね、そして、いつの間にか釜の湯も沸かして良人の歸宅を」

『そよさうかい、むよさうか、よく孝行してくれるよ、しかし孝行甲斐のねエ父を持つて可愛さうだ、あと貧乏は仕たくねエよなア嬢ア』ですよねエ、いつも言ふこつてすが、目鼻立といひ氣心といひ、萬事あの子は妾等夫婦の中に過ぎた出來物ですよ、あれ、いつの間に何處へか出て行きましたよ』

『知れた事を言へ、眼前で右左から現在の親に譽められて小面の雜作を崩すやうな甘ツたれた子息ぢやアねエ、だから平常に言ふことよ、もし譽めるなら乃公と差對ひで彼奴の居らねエ時に思ひ切り譽めろといふのさ馬鹿、しかし眞實だ、彼奴めがあるから乃公も氣を落さず、どうせ叶はねエ貧乏と力まかせて取組んで稼ぐもんの、もしこれが夫婦つきりで愛著の錢

さへ無けりやア、ちと水臭いこつたが根は合せ物の差迫つた相談づく互ひの身の爲だ、おぬしにも末の見込のねエ苦勞もさせずよ、つまり今までの縁と諦めて別れ〜に身の立てやうもあらうぢやアねエか、ハ、ハ、ハ、ところが彼奴に引かされて、しがねエ下司の生命も珠玉のやうに思つてさ、苦しみながらの糞働きよ、この父は牛馬に等しい車力でも、どうか一人の子息だけは人間尋常の世渡りで行末の運を取らせてエ』そりやア良人、妾だつて朝夕そればかりが現世の念願で、かうして居ますものよ、もし萬一あの子が煩らつて死で仕舞つたら、どう仕ましやう』えッ不吉な事を言ふない、たとひ夫婦は此儘飢て乾物になるとも親の一念で彼奴ばかりは日本晴れの男一疋にするのだ、男といやア人間の運も大した天地の相違はあるもんだぜ現に柏木の旦那を見ろ、この廣い江戸中で木曾の檜木材木を一手に賣捌いて、ざつと世間の風聞が百萬兩といふ大身代、この間も御店の手代衆に頼んで置いた、もし旦那

の爪の切端でもあれば戴きたい、煎じ詰めて一人の小倅に吞ませますと、ねエ嬢ア親心は馬鹿なもんだよ、ハ、ハ、ハ、時に戌松どこへ往ったか、ちよいと近所を探して来い、折角の親孝行に買ってくれた酒だ、彼奴が居ねエと何だか盗んで飲むやうな気がして、うまくねエぢやアちよいと尋ねて来ますから、その間に良人、あの釜の湯で汗を流してね『おツとよし早く呼んで来てくれ』

柏木傳右衛門が建聯ねたる材木小屋、深川の木場より一尺角に二間もの節なし檜木十三本を車に積んで、本所南割下水の津輕家が普請場までの御用、かの喜助が一生懸命の車力に揖棒を曳きつゝ燃ゆるが如き夏の炎天に總身の膏汗は瀧の如く、喘ぎくゝて吼ゆる掛聲さへ膈を絞りながらの苦し氣に、今や小名木川の高橋を渡らんとせし折しも、彼方より來かゝる一

挺の駕あり、

頭上より射込まると炎天の眞晝に加之も荷は重し橋は高し、たゞ車の揖棒に五體をかけて地に伏すが如く、額越に見る目の寸隙なければ一入さらに聲を張上げながら、ごろ／＼と曳卸せし間一髪の過誤、橋の袂に避けむとせし、駕の立場や淺かりけむ、飛ぶが如き車軸の勢ひに人足の息杖を跳飛して駕は忽ち眞逆倒、乗りし主は中より手鞠に等しく大地へ抛出されぬ、はつと思へども高橋の上より曳卸したる荷車の勢ひ、喜助そのまゝ揖棒に吊られて十間あまり走りきつゝ、満身の力に引止むるや否や忽ち取返して目に入る額の汗を拭ひながら、よく見れば南無三寶、駕人足は兼ねて知る柏木の常備、しかも大地へ轉けいでゝ頬の邊を摺剝いたるは主人の傳右衛門『やあッ、しまッた』

喜助そのまゝ二の句も出でず、あまりの驚愕に我を忘れて狼狽へつゝ、たゞ茫然と立ッたる

男

山

二

左右より駕人足が俄かに眼を怒らして嚙附く如く大聲を張上げぬ「こゝ此畜生奴、さア大變だ、とんでもねエ事を仕やあがつたぞ、お店の御恩で生命を繋ぐ車力が其お店の御主人を、うぬ開盲目か、用のねエ目玉なら抉り取つて鴉の餌にでもしろ、また何のこつた、飯粒を喰つた金魚のやうに、今更、ぎろくく剥出しても濟んだ後の祭禮だ、勿體ねエ呆れ蛙の酒ッ面奴、氣附藥の代りに鐵拳でも喰へッ」叫ぶ聲もろとも前後より音高き拳の雨霰、宛から頭骨の割るよかと思ふばかりに痛めども、喜助じつと堪へて大地に打屈みしまよ、我身の不運と兩眼を閉ぢたる肩口へ果は土足をかけて蹂躪られ、おもはず無念の眼を開けば「なよ何だ其面ア、うぬ手でも出す氣か」どう致しまして、何とも申譯のない仕末で、しかし直接には却つて恐れ入りますから、いづれ改めて御手代衆まで、お謝罪に出ます覺悟「お謝罪ぐらゐで濟めば、汝の僥倖だ、願の乾上らねエ用心しろッ」

柏木傳右衛門は摺剝いたる頬に懷紙を押當てよ、前後より打たれ蹴らるよ喜助の體を無言のまよ見物せしが、いつしか往來の人の歩を停めて見る目うるさしとや、俄かに駕人足を促がしながら馳去りぬ、

喜助、やうく起上つて、無念に湧出づる涙を拭ひ、拳に打たれて亂れし頭髮を搔上げ、土足に踏まれて浴びたる砂うち拂ひながら、馳去る駕を見送りて思はず齒を嚙占めつよ、額際より流れくるを汗かと思れば血汐の雫、さては割られしと今更に心づけば、肩口を踏まれて大地の小砂礫に引摺られたる兩脛よりも黒血たらくと流れて足の甲まで傳はりぬ、

太鼓の胴に似たる高橋の上より力に餘る重荷を一人で曳卸したる車輪の勢ひ、しかも平生よりは一倍の大聲張上げしに、二人の息杖で前後自由に昇くべき輕き一挺の駕の立場を失うて、我を開盲目と叫ぶのみか、眼前の忠義立に追從輕薄の拳もて打たれ叩かれ蹂躪られたる無念

さ口惜しさ、鏡の上を曳出す如き大道の中央でさへ車力は前途を見られぬための力聲掛聲、まして隔てし駕の中を誰彼と知るべき、飯米種の御主人と思へばこそ、大地に伏して飽くまで神妙に謝罪入ッたる我を、得たる幸ひの手込にして頭上より兩脛より黒血の流るとまでとは、おのれ虎の威をかる野狐奴、もし我に愛著の妻子なくば、彼奴等二人あのまよの無事には歸すまじきもの、あゝ貧は辛し、どこまで附纏うて我を白痴にするか、なさけなし不運の身は片輪も同然、いづこの里にも持つて生れし手足の働き利かぬものとぞ歎きぬ、

車力の喜助、小名木川の高橋に人知れぬ男泣きの涙を絞りしが、妻子ある身の飯米種には勝れぬ浮世の悲しさ、うたれ叩かれ蹂躪られたる頭と脛の疵を古手拭引裂いて包みながら、またもや炎天に曝され重き材木車を曳いて本所割下水の津輕家が普請場まで運び込みつと、身も

心も弱り果てしを我から勵まして其日の夕暮、やうく茅場間の柏木が店頭へ立歸るや否車力がかりの手代が前に今日の委細を演べたる上、なほ踏潰されし平蜘蛛の如くなつて頻りに謝罪入れば、しばらく其處に待として奥に入りしが、やがて出来りて眉を擧めつと膝を進めぬ『おい喜助、汝が平生の正直を段々と申上げた後、あらためて今日の御託を仕てやツたがね、何分お顔に少々摺疵の痕も残ツたほどのこツたから、なほ汝、ぢきくお庭口から這ひ寄ツて歎く方が後の爲に宜からう、幸ひ奥座敷の縁端で御酒の最中、さして御機嫌の悪いやうでもないから、つまり安心して喜助、夏雲の夕脚と御意の變らぬうち一時も早く誰か手のあい

に小僧この喜助を案内してやれ』
 十四五ばかりの小僧に導かれて、二年以來この柱木の車力はすれども、店頭の外は覗いた事もない奥深き庭口の此方より恐るく身を縮めて飛石を舐めんばかりに這込めば、をりしも

男 山

主人の傳右衛門は軒の簾をかよけて廣縁の端近く唐織の薄物を敷かせながら、薩摩上布の白帷子に浴後の涼味も飽足らでや、十六七の容貌よき侍婢二人に音なき深草團扇の風を送らせつと、前には山海の珍味を置並べて、酌には近ごろ京都より召抱へたる新寵の美妾が色香に酔ひ、尺にも餘る銀の長煙管に切放し一時替の青竹の灰吹を叩いて、馨り床しく立昇る名物の餘煙もろとも、しゆツと高く音さす華奢の振舞、およそ當時歴々の大名高家も及ばぬ體に、年が年中その身の膏を絞つて親子三人の露命を繋ぎかねたる車力の喜助、思はず夢心地ほつとして目のみ見張りぬ、

『大勢の車力いち／＼名も顔も知らぬが、けふ始めて見て聞いた喜助、汝、ことし幾歳だ』へい四十二になります、それは兎も角、今日は實に何とも申譯のない無調法を致しまして、へい、へいどうか取るに足らぬ哀れな奴と思召しまして『おい／＼喜助、よく聞け、あの時は途中

でもあるし晝日中、汝のやうなもんを捉へて怒りも出来ないから、其まよにして置いたが、四十二といやア先づ車力中の年輩だらう、そいつが汝、今日のやうな飛でもない間違、もし車の揖棒を眞正面にうけて此傳右衛門が即死でも仕たら汝、どうする』重々恐れ入ります、今更ら、お謝罪の致しやうも御座いません不始末で『恐れ入ったばかりで濟むか馬鹿奴、たゞ一口に車力といへば身分は軽くつても年中重荷を曳いて此江戸繁昌の巷街を往來する力業に、汝のやうな血氣を過ぎた開首目は危険だ、もはや一日も柏木の印神天を著せて置く事ならな

いから、さう思へ、手代に言附けて店頭より叩き出せば宜い筈の奴だが、二度と再び人を頼んで謝罪の叶はない證據に乃公が言渡すのだ、第一は外の車力どもが訓戒だ』御立腹は御尤さまで、今更ら一言の申譯も立たない身で御座いますが、きつと以後は氣を附けて心得ますから、何卒どうか、今回かぎりは『ならない』でも御座いませうが、この喜助め、もし御當

家を追出されました曉は全く其日からの立往生知れたことを言へ、車力で柏木を追出されたといやア江戸市中どの材木問屋に泣附ても無効だ、また汝も男らしう諦めて乃公が息の根のかよらない外の活業をしろ『さてその活業の出来ます身分で御座いますれば兎も角、また自己の無調法で自己一人が路頭に迷ひますなら兎も角、自業自得と諦らめて致方も御座いませんが、夢にも今日の事を知らずに果敢ない拙者を杖柱とも致して居ります婢アや小倅めが、旦那様、あすの日から『えッ蒼蠅い、汝の婢や小倅の生死を乃公が知ツた事かい、氣にさへ入れば非人乞食に千兩萬兩を呉れてもやる、また意地となれば大名でも高家でも小判責の一喧嘩するこの傳右衛門が面上へ、たとへ怪我でも摺疵を附けた汝は太した手柄だぞ、第一また今日の事がなくツても汝の面相見るから癩に觸ツて嫌な奴だ、痛い目に逢はないうち早く出て行け』此上、どう謝罪を致しましても『無効だ』いかほど、お縋り申して、歎願を

致しましても『汚らはしい見るも嫌、蟲の好かない奴だ、しかし汝のやうな奴でも縁あツて連添ふ女房の出来たのが不思議だ、やはり子は可愛いかね』

柏木傳右衛門、ことし三十二の血氣、しかも三代不斷の黄金の光輝より湧出でつゝ世間知らずの我まよに育ちて傍若無人に生長ちし癩癩の蟲、むらくと心頭に上る時は忽ち狂氣染み、た、悪口雑言の癖ありて、好色の道にも十三四の少女を七日目に一人づつ新しく取替て其泣叫ぶ悲鳴を慰むほどの残忍酷薄、まして自己が息の端に露命を繋ぐ車力の喜助に對うて何の用捨のあるべき、しかも酒を飲んで酔へば酔ふほど頬の摺疵おもひの外に痛み出したる腹立まぎれ、理も非もなく頭上より罵り喚いて畜類の如く卑めしかば、流石の喜助も今は堪兼ねて、憤怒の顔色くわツと眼を見開くや否、庭の飛石に伏したる五體、むツくり跳起して、仁王立とぞなりぬ『やい傳右衛門うぬも人間か』

車力の喜助は無念の涙を呑込みながら、妻子ある身の飯米種には勝たれぬ浮世と諦めて、蟲の如く地に這ひ庭石の苔を舐めんばかりに歎けども頼めども、主人の柏木傳右衛門は馬耳東風、世間しらすの大家に生れて加之も癩癩に募れば忽ち狂氣じみたる三十二の血氣、大盃を取つて酔へば酔ふほど面上の摺疵に疼痛を覺えし腹立まぎれ、果は四十二の厄男が拳を握り土に喰ひ附いて口惜涙の吼面に泣く體を酒の下物と慰さみぬ、

沸返る憤怒の腸じつと堪へて、あくまで忍びし喜助ながら、汝のやうな奴でも縁あつて女房の出來たが不思議、やはり人間並に子は可愛いかと言はるよや否、その女房と子あればこそ斯くの喜助、思はず五體を跳起きて俄かに變る悲憤の顔色、やい傳右衛門、うぬも人間かと叫んで仁王立となりし面上を、的に規うて飛來る盃の勢ひ微塵に碎けて額口の血汐さつと迸しりぬ、

「やア、うぬツ」この傳右衛門に對つて、うぬとは何のこつた畜生め、理を非に枉けて踏潰されながら、こゝ斯れほど下手から拜み奉つて這出た喜助を一度ならず、二度まで「ハ、ハ、口惜しいか、抛けたのが盃で當つたところが額際幸ひ軽く濟んで生命に別條ないのが倅だ、蛆蟲同然の奴に理も非もあるものか、脚下の明らいうち早く歸れ、うかく、すると目が眩むぞ」たとひ一時の目は眩んでも、うまれついた心は年中の間で義理人情を知らねエ奴たア雲泥の相違だこの屋臺骨になるまで、どれほど世間の人を泣かして溜込んだか、罪の深い親譲りの小判に湧て出た金糞野郎め、少しは物の冥加を知れ、今この喜物はな、いと可愛の妻子あるため入らぬ生命を捨兼ねて、道理も男も踏潰された此まよで悄然と歸るが、うらみ重なる人の一念どこから報ふか傳右衛門風の心地と寝た時に用心しろよ、年期奉公の文差入れた主従でも、無理往生の生血を絞つて濟むと思ふか、まして無價の一飯も貰はず

日其日の賃錢で渡ッて來た材木屋の車力、それも涙を呑んで首ッ骨の折れるほど謝罪ぬい
 上の喜助、もう斯うなりやア遠慮會釋も仕ねエで、さア改めて手を出すなら出してみる、
 から這へば圖に乗る上面奴め、弱身に崇る厄病神たアうぬがこッた、乃公が妻子を拜んで蔭
 ながら生命の親と思へ、もし獨身なら此場で現世の埒を明ける男だぞッ』
 平生は下司業の車力に似合はぬ心の弱蟲、口も手も無器用もの、只正直一片を取得の喜助と
 思ひの外、忍びくし堪忍袋の一時に張裂けたる顔色、今は飛かよッて咽喉笛に喰ひ附かん
 かと思ふばかりの勢ひに、傍若無人の悪口雜言は吐けども根は大家の日蔭に育ちし傳右衛門、
 俄かに薄氣味わるく、酒の酔も醒果て座に堪へずや、すツと起ッて其のまゝ奥へ入りぬ、
 まだ乾ぬ悲憤の涙もろとも庭口に取残されたる喜助、いつまで斯くてあるべき、まして暮か
 かる空を仰いで我歸宅の遅きを待つ妻子が事を思へば、今更ら物悲しく何とやら無常を感じ

て、其まゝ俄かに庭口を立出でつゝ、建聯ねたる奥庫の前まで來かよる折しも、八九人の荒
 男どんと一時に前後左右より躍りいで、一人の喜助を中央に取圍みながら物をも言はず打
 つ蹴る踏む突く引き摺廻す袋叩きの音、無念に叫ぶ喜助の悲鳴もろとも、流石に廣き家内を
 漏れて塀の外まで聞こえぬ、
 あはれ斯くとも知らず良人を扶けて浮世の貧苦に伴ふ貞女の妻と、母を扶けて近處合壁の町
 小使に備はれながら束の間も忘れぬ父へ孝行の戌松と、嗚や今ごろ門口に出つ入りつ眉を擧
 めて遅き歸宅を待ちわびん、

龜島町の名に欺されて集まりし福の神、はツと驚いて立去りし跡へ貧乏神のみ鎮座まします
 天の岩戸めいたる路次の奥に兩方より食出でたる廂と廂うち合うて左右七軒づつの總長屋を

棟割の端に塵塚と隣れる九尺二間の夕まぐれ、傾く軒の蚊柱いつしか消て待設けたる蜘蛛の巢に、はや宵月の影きらりと物凄くかよれる風情、秋よりも淋しき夏の夜の哀れ深し、家内には燈火うす闇く、まだ夕餐の箸も得取らぬ空腹を抱へながら、遅き良人の歸家を待ちび父を待わびて、しよんほりと壁にうつれる母子の影、いと悲しげに浮世の貧苦を伴ひぬ、同じ荷車も材木問屋のみは夜に入りて江戸市中に車力を使はぬ習慣、されば今ごろまで何として歸家の遅きぞ、獨身ならねば平生より朋輩交際に酔ふた例なく、これまで不意の店祝ひに酒食を振舞はれても、箸も附けず其まよ携へ歸りて妻子の笑顔を喜ぶ性質、まして其日の賃錢さへ取れば急いで走歸るべき良人が、けふに限りて夜に入れど影さへ見えぬ不思議さ、憂を慰さめんとて立寄る親類はなし、餘所に一夜を明すほどの用あるべき筈はなし、もしや四十二の厄崇りに思はぬ災難をうけしかと、さらぬも沈み勝なる胸を痛めて目に持つ涙、そ

ツと顔を反けて『ねエ戊松、何故かうお父様は遅いのだらうね』

安産を祈る腹帯も戊の日を選べば、まして戊年の戊の日に生れし子は無事息災、行末いよいよ目出たく身の運も強しとて其名を其まよ戊松と呼びつよ、ことし十四の曉まで蟲氣もなく自然の目鼻立氣心さへ親に勝りし一粒種、わけて生れついたる孝心は長屋中の悪太郎が折檻の手に引出され、しかも朝夕の小腕に水を汲み飯を炊き母の手内職を助けながら其暇に走り廻って近所の用を整へ、わづかに得たる烏目を積で父が寢酒にするほどの心底、わざと何気なき顔色に母を見返りつよ『おツ母さん、平生より一刻か一刻半は遅いでせうが、何まだ甲宵ですよ、しかし、ちよいと一走、お店まで往つて見ませう、もし其うちお父様が歸つて來ても、迎ひに出たとはいはないで近處の用に往つたと、ね』

わざと軽く口には何気なき體にいへど、胸には母にも勝して父を思ふ戊松、其まよ走出づれ

ば、六日ばかりの宵月いつしか消て、空には星明あれども細き裏長屋の軒下つゞき薄闇く今しも路次口を出でし彼方に誰とも知らぬ人影、ほつと立ちて我名を呼びぬ『戌松か』

さては父の聲と思はず走寄れば、薄闇に確と見えねど平生になく打濁れたる體、無言のまゝ暫し動かす立てるのみか、やうく運ぶ脚下も何とやら力なけに、さりとして酒に酔ひし香もなき不思議さ『お父様、なぜ今夜ア斯う遅かつたの、どうかしたの、急に気分でも悪くなつたの』いや、別にどうも仕ないが、今夜ア少々、おそくなる理由があつたのだ、さぞ心配して居たらう』

父の喜助そのまゝ靜かに歩みしが、路次口の小石に躓いて、よろ／＼とするや否、どつと大地に仆れながら、驚いて走寄る我子の手首を握りつゝ俄かに苦しげの聲『おッ母アを、汝ばかりぢやアいけねエ、おッ母アも呼んできてくれ』

さては尋常事ならずと、飛ぶが如く我家に走入つて、提燈に火をうつす寸暇なければ破れし行燈そのまゝ提げながら、母もろとも取つて返して仆れし父を見れば、髪ふり亂して身に纏へる單衣も散々に引裂かれ、手といはず足といはず引摺引廻されたる疵の痕、しかも満面膨上りて紫色に變ぜる額際より血汐の流れいでたる體に、母子おもはず前後に取附いて、わつと泣叫びぬ、

迎も遁れぬ罪あつて天下の大法に斬らるべき首さへ、そつと贈る金次第の世の中、無事に繋ぎ止めて鼻唄うたふも自由なれば、まして其日暮しの裸武者が親重代大判小判の甲冑を重ねたる大家に對うて何の矢も亦も立つべき、頭の天邊より踏潰されて理を非に枉けられ、無理往生に押附けられて鴉を鷲といはれても、追從輕薄の世間に眞正の批判なく、盲目千人の浮

世に一人の味方もなくて、袋叩きに逢うたる喜助あはれ其まよの泣寝入とぞなりぬ、さらぬも其日くを送りかねたる貧乏世帯に、稼いでも稼いでも足らぬ勝なる主人の働きを失なうて荒果てし九尺二間の破床に醫藥も叶はぬ無念さ心外さ、妻と子が病める枕の前後に取附いて、飢ゑたる腹より今は泣音の聲も得立てず、たと神に祈り佛に念する外は、をりをり茅場町の柏木が家の方角、うらめしげに睨めども石地藏の頭を蚊が刺すほどの甲斐もなし、始め高橋にて駕人足に打たれし時は、つまり我身の不運とのみ諦めて、さまでの無念も痛疼もなかりしが、柏木の奥庭にて平蜘蛛の如く謝罪入りし頭上より主人の傳右衛門に罵り喚かれ、口惜涙に男泣の四十面を酒の下物にせられし上、庫の前にて八九人の荒男に取圍まれ、不意の袋叩きに逢うて、大道へ抛出されし時は、怨恨骨髓に徹して腸沸返る血の涙、されどなほ一念やうく這うて立歸りしが、妻子の顔を見て這處を我家と思ふや否、今まで張切つた

る氣も心も一時に弛んで五體の骨節も砕け臟腑も破るよほどの苦しさ痛さ、どつと其まよ病床についてより三日目の夜更け人定まりし後、うす闇の燈火の影に重き枕をあけながら、まだ寝もやらぬ妻と子を呼寄せつよ、息も絶えくくに語り出しぬ、

『腹の中から自然に煩ひ出した病氣でもなし、つまり外から出來た疼痛さへ退いて仕舞やア宜いやうなもんの、しかし人間は生身だ、いつ何時、萬一の事がないにも限らねエ、ところで、もし乃公が此まよ、これが原因で死んだ時は、ド、どうするあの柏木は乃公が怨死の一念でも、うぬツ、あのまよ無事に置く奴ぢやアねエが、現在、あとに残る妻子が迷ひの種だ、宜い分別でもありやア今のうち聞かしてくれ、只、たゞこればかりが氣がかりだ『えよ何ですよ心弱い、不吉な事を、大丈夫ですから、しつかりして下さい』いや、氣は確乎してる覺悟でも、いけねエ、ぶち斬られたか割られた大疵でもありやア、また却つて療治の届く方もある

が、かう酷く身體中を袋叩きの痛疼に逢ッちやア迎も無効だ、よし助かつたところが生甲斐のねエ不具だ。『たとひ手足が叶はなくなつても宜いから、一生懸命に氣を張切ッて、養生して下さい、ね、もう戌松も來年は十五、どツか末の見込のある商家へ奉公に出しても宜し、あとは妾が細腕ながら夜の目も寝ずに稼げば、まさか夫婦が飢死もしますまいから安心して良人、ねエ 十五といへば、二十歳の男一人前になるのも僅か五年ですよ』その五年は儲置いて、今が今、あぶねエ乃公の身體だ、多年平生、この父ア其日を食ふや食はずの車力しても、せめて一人の子だけは、戌松だけは、どうか立派な人間に仕上りたいと、こゝ此事ばかりを快樂に今日まで働いて來たが思ひも寄らねエ災難で四十二の怨死たア、ざよ残念だ無念だ、口惜い、あの柏木め、今に見ろ『いへ、その残念も怨恨も、道理ですがね、今その身體で氣を揉んでは却ッて良人、つまり此方が損の上の損ですから、これを厄年の厄落しと諦めて、

おだやかに養生して下さい、いくら長者でも分限者でも理を非に枉けて人の弱身を踏潰した罪報が無くて濟みますもんか、あのまよ捨て置いても神様や佛様が御裁判下さいますよ』父と母とが涙の物語りを、差俯きながら無言のまよ目を閉ぢ拳を握り齒を喰鳴して聞居たる戌松、おもはず蛇の如く頭をあけて枕頭に膝行寄りつよ『お父様、今、今、おッ母アが言ふ通り、安心して氣長く養生して、もとの身體になつて下さいもし、もし萬々一、お父様が此まよシ、死んで仕舞ッたら、私が一生懸命に出世した後、畜生、あの柏木の家庫を野原にして、その其中央に、お父様立派な石碑を立てるから』きくや否、父の喜助おもはず身の痛疼を打ち忘れて病床の中より這出でながら、我子の手首じツと握ッて今更に其顔つれなくと見上げつよ無念と怨恨と喜悅の涙とりませて瀧の如し『おッ戌松、よく言ッた、よく言ッて来た、其、その一言が冥途の土産だ、草葉の蔭から見居るぞ、りよ立派に出世してこゝ、

の仇敵を取つてくれ、戌松、たのむぞ』

黄金の吹風す勢ひには理も非もなく、長者風は鐵砲玉よりも怖ろしとの世諺、車力の喜助が無念の吼面を酒の下物に弄ばんとせしが、おもひの外口の返答に柏木傳右衛門くわつと怒つてをりしも、來合せし河岸の小揚人足八九人に命じつと袋叩きにせしが、いづれも血氣の荒男、力まかせの激しき拳や過たりけん、七日ばかりの夜晝を悶え苦しんで茅場町の方角を睨みながら怨死に死せしとの噂を聞くより、流石の傳右衛門おもはず身の毛を立て薄氣味わるく、世間の取沙汰、家の外聞かたぐ、今更ら後悔して小判五兩の香奠を贈りしが、喜助の一子ことし十四の戌松、その香奠を土足に踏躪つて柏木の店に投込むや否、木曾檜材木問屋と筆太に記せる表看板に痰ひツかけて走歸つたる猛勢、小兒ながらも物凄かりし面魂と、見

しもの語り傳へて舌を巻きぬ、

金持の目出たい祝儀の寄合よりも、貧乏人が不吉凶事の訪弔慰、うき世の情は同じ兩側に七軒づつ二七十四軒の長屋中が寄集つて、涙に残る母子を扶け勵ましつと、やうく形式ばかりの野邊葬式を濟し果てぬ、
今日を初七日の夕暮、母は佛壇もなき裸位牌に對うて泣きながら念佛の聲あはれを催し、子は門口の傾く柱に倚りて悲し氣に暮行く空を眺めつと、しよんほりと佇む折しも、袖の商人羽織きたる四十前後の男、ふと路次を入來りて四邊みまはし戌松に對ひ『この裏屋に車力の喜助といふ人が住んで居た筈だが、どこだね』はい其喜助は私の父で近ごろ『むと汝が子息か、母親は、家かね』

戌松そのまゝ驅入ッて母を呼べば、商人體の男も入來りて會釋しながら、懷中より一箇の金封を母子の前に差出しつゝ、「私は北新堀の宇野屋庄兵衛と言ッて、まだ問屋株には届かないがまづ端材木を商賣にするもんで、きけば當家の主人も氣の毒な事をしたよ、また、いろいろ世間の風聞も耳にするがね、まア時の災難と諦めて蟲を殺す方が却て佛のためだ、ところで、こりやア、ほんの寸志、佛前に備へて下さい、あの柏木の常備になるまでをりく、車力を頼んだこともあつたが、柄にない善い人だつたよ、ねエ、かあいさうに、いや飛でもない災難に逢つたもんだ」

近所合壁の長屋中が寄集まつて、やうく形式ばかりの野邊送りを仕てくれし外、同じ柏木に常備の車力のみでも五十人以上と聞及ぶに、たれ一人の訪來る影もなき怨めしの世の中にこれはまた身分も違ひ馴染も薄き人が、わざく香奠携へて母子の悲哀を慰めむとの芳志、いづこを頼る甲斐もなく果敢なき身には猶更ら嬉しさの涙に胸迫りて、たゞ母子もろとも餌を乞ふ猿の如くに伏拜むのみ、驚喜に餘りて物さへ得言はぬ風情を、宇野屋庄兵衛みる目いぢらしと顔を反けながら、そつと拭ふ袖の露「今も言ふ通り、ほんの二三度車力を頼んだばかりだがね、相手が私の身にも、ちとばかり文句のある柏木で、こゝの一人子息が今年十四で、しかも五兩の香奠を土足に踏躑つて店頭へ投込だ上、江戸中を我物顔の獨占あの金看板に痰ひツかけたといふ噂を聞いて、いや感心しました、實は宇野屋庄兵衛その性根に惚込で來ました、なるほど、かう言へば死んだ人に濟まないが、自然の目鼻立といひ立振舞といひ全くの親勝りだところで物は相談だがね、なんと其子息を私に呉れまいかな、涙の中の一人子息で死んだ良人の忘形見、まして行末の杖柱ともする一粒種、庄兵衛が子に貰ひたいと言ふんぢやアない、どうせ奉公に出すもんなら、この宇野屋に天晴れ仕込ましてくれまいかとの相

談さ、ねエ母親、その代り和女さんが喰ふだけの事は、及ばずながら月々きツと仕送りませう」

盲龜の浮木、地獄の佛、これぞ亡夫の魂魄まだ家の棟に止まって残る妻子を守らせ玉ふかとおもはず出でし念佛の聲もろとも、涙片手に庄兵衛を伏拜ンで我子を引寄せながら「お頼み申します、お助け下さいまし。お頼み申します。お頼み申します」

北新堀の宇野屋庄兵衛といへるは、當時江戸三十七軒の間屋株に連りし材木屋なりしが、十年の間に二度の丸焼となりて、裸一貫、もとの木阿彌より七年以來あらたに蔭直したる身代なれば、やうく此ごろ三間まぐちの店を構へて、問屋中が面倒なりと見向もせざる小普請の端材木請負ひつよ、いづこの入札場にも羽翼の薄きを歎いて空しく跳飛され、たま〜

神社佛閣の大建立を覗うて自己の度胸一個の一手に占めむとすれど、末世の賣僧坊主さては澆季の禰宜神主に食傷さすほど小判の餌食なければ、みすく太い奴に仕てやられて細き我内證の無念を忍びぬ、

されど此庄兵衛は元來の男振にて、度胸も分別も何處やら一癖あるべき面魂、おのれやれ、金は天下の廻り物、いつかは生涯一度の運の神と引組で此腕力を現はし、もとの身代百層倍にして今の間屋どもを鼻息に吹飛しくれむと、あけても暮れても身を粉にして立働けば、丸焼に出直したる三間まぐちの外間よりは、新世帯おもひの外に打寛いで、ことし三十五の女房と十六になる娘一人、飯炊の下女に常備ひの車力二人を使うて、今このまゝに足る事をさへ知れば其日を送るに何の苦勞なけれど、太腹の庄兵衛は額越しに天井を睨んでおのれ何の糞、

主人も番頭も手代も丁稚小僧も、庄兵衛たゞ自己一人の身に引ッ構へて、この店を一すづとなりとも擴げむと、傍目も觸らず一心不亂に立働く折しも、かの喜助が事を聞て俄かに同情を催し、その子の戌松が振舞を聞て思はず膝を打ちぬ、しかも相手が茅場町の柏木とは平生より我を蛆蟲か何ぞのやうに心得たる奴、七年以前の丸焼に灰となつたる檜九本の借越を責めて裸一貫の我を苦しめ去年大橋際の御船藏普請に江戸中の材木屋が、入札せし時、いかに醉食ふた酒の上とはいへ、この庄兵衛を満座の中に指さしながら、乞食小屋の修繕も覺束ない身代で此大普請に彼奴の出たは何のため、うかくして腰巾著を仕てやらるゝなと吐した奴、面白いぞ、今は金こそなければ此庄兵衛が生れついた條鐵入の腕に糾かけて、あの金看板に青痰ひツかけたる十四の小僧を仕立あげ、主従もろとも怨恨の一念に稼ぎ出せば、木像に等しき柏木傳右衛門め、消て無くなるまで削り取ツてくれむとぞ思ひぬ、

父は其日を送りかねたる下司業の車力でも、子は持つて生れた天生の才氣に自然と備はる目鼻立、珠玉も黄金も土の中より湧いて出ると思へば人も氏には依らぬもの、天晴此奴を育てあげ磨きあげた曉、もし鑑定通りに違はずば一人の娘を見合せもし、我一代に運なくば二代目の宇野屋に材木天下を取らせむと、名は主従ながら我子に等しく愛撫めば、戌松もまた世間普通の丁稚小僧に打ッて變りし心の活動、父が怨死の枕頭にて吐きし一言、あの柏木の家庫を踏潰して草原にせし上、その中央に見上ぐるほどの石碑を立て、回向せずば舌喰切ッて死ぬばかりと、口にはねど朝夕の念佛に怨恨の眼を張ッて立働く體、庄兵衛いよく無類の逸物を掘出したる心地、良人に連添ふ妻も其氣になりて萬事の世話を盡せばことし十六の娘までが父母を見習ふ自然の優しさ、我身より二つ年下ぞと陰陽なく勞はりつゝ、宛がら人の弟を持つたる如くに思ひ込みぬ、

かくと傳ひきく龜島町の裏長屋には、亡父の回向と現在の内職に寸暇なき手を合して拜みつ
つ、夜は寝るにも北新堀の方角に足を向けず、朝は東天に起出でて井戸端の初水を汲上げた
がら、御主人大切、お家繁昌、我子の無事息災、厚顔しけれど此身も子息の出世しまするま
でと、目を閉ぢ息を含んで暫し死せるが如く専念に祈りぬ、

いやが上に重なり合うて湧くが如き夏雲の炎暑も一タ立さつと降りし後は、夕陽前の空に虹
うるはしく、地を掃く風さへ塵埃もあけずに往來の袖袂を吹て、春に勝る十千萬兩この一刻
にあり、

をりしも柏木傳右衛門が深川八幡へ詣りし歸り途幸ひ永代橋の涼しさは一入の心地なるべし
と、駕を立出でて橋の中央まで歩みながら、ふと傍を見れば、母親と覺しき女に連られたる十

六七の小娘沖より吹來る涼風に對うて欄干に手をかけつゝ立並べる後姿、宛がら名筆の浮世
繪に等しく、すつと撫下せし地藏肩、ほつそりとせし柳腰、雪を欺く眞白の襟首に青みが
りし毛際を雨後の夕陽に照返されて、得も言はれぬ風情の美はしさに、元來好色の傳右衛
門おもはず歩を停めしがまた二歩三歩そのまゝ行過ぎて見返れば、鴉の濡羽色に似たる艶々
しき鬢の毛に暗合うて、まだ戀を知らぬ薄化粧の横顔何心なく此方を振向きし鼻筋といひ唇
端といひ、いきくと張切つたる黒目勝は正しく男の生命取に生れついたり、

后位女御に備はるべき前には夢にも恐れあり、慾得しらぬ野暮と浮世を捨てし尼法師と良人
に死別れし石後家とは手に合ねど、およそ天下にありとあらゆる女、金にあかして此柏木が
自由にならぬ白痴やある、あの小娘いづこの女ぞ、見届けて來い、附添ふ下女も下男もなく武
家生育でもない證據は定めて中以下の小商家、たゞ母親に連られて輕々しい風俗は此方より

捻り倒すに等しけれど、あの庄兵衛といふ奴、身の分際も辨へず瘦身代の瘦骨に角立てよ、前年も自己が丸焼を幸ひ貸越の檜を踏抜かむとせし男、近くは去年御船藏普請の時、満座の中央で恥しめたる、我に對うて眞正面より盾を突出したる前途不見、いづれ一度や二度の交渉では容易に首肯くべき奴ならねど、高が吹て飛散るばかりの手薄い内證、浮世の苦しさに無くて叶はぬは小判の音を聞けば、意地も理窟も絲瓜もあるまじ、まして動かぬ石でも鐵でも自由にするが色の興味いほど敵の娘を奪うて慰むも却て面白しと、黄金の力に横紙破りの柏木傳右衛門おもはず冷なる笑を含みぬ、

北新堀に續きし箱崎町の南角に、半田幸庵とて此ごろ俄かに名をあけし流行醫者より、一日の夕方宇野屋庄兵衛が方へ普請に就ての材木用ありとぞ言越しぬ、

商賣用とあれば生命の外萬事倅置て、其まよ走行きしに、此方へと導かれしは奥まりたる小座敷やがて仔細らしき咳拂ひの聲と共に主人の幸庵、みれば五十の上を三つ四つ越し坊主額を艶々と光らしつよ、みづから亭主持の煙草盆を提けて靜かに立出でながら「これはく定めて御繁忙中を、わざわざ呼寄せまして氣の毒、さア遠慮なしに、ずつと、ずつと」

「どう致しまして、これが勝手に御座います」いや、それでは却て談話が打解けないから、まア兎も角、おい誰か、お茶を持ッて來いよ、お菓子添て、ハ、ハ、ハ、醫者の家といふものは、何だか年中さわくと取込があるやうでな」取も直さず御繁昌さまで「なになに、幸ひと此邊に醫者がないから、いはゞ烏なき里の蝙蝠で、ハ、ハ、ハ、時に外でも御座らんが、近々、裏の空地に十坪ばかりの二階家を建てたいと思ッて、また木口も、なるべく選んでね」
「有難う御座います、お出入の大工を御差向け下さいますれば篤と相談いたしました上、早

速見積書を御覽に入れませう、お見かけ通り手薄うは御座いますが、外々よりは精々と働か
 まして『さうして下さい、時に宇野屋さん、不意に妙な事を聞くが、大層、美しい娘御を持
 ツて居られるさうだね、専ら此邊の喧しい評判だよ』そりやア先生、何かの御間違ひで御座
 いますよ、なるほど私にも今年十六になる一人の娘は御座いますが、とりわけ不束な生來で
 加之も貧乏世帯の抛遣に致して置きますから、逆も入様の御目に止まる筈は『いや、親
 の口から自分の娘自慢も出来まいからさう言はれるが、確實に聞及んで居ますよ、現に家の
 書生どもが玄關で毎日々々隙さへあれば夢中になつて大騒動、いや蒼蠅いこつてね、ハ、ハ、
 ハ』恐れ入ります、さやうな筈は御座いせんが、お若い方と申しますものは、何を見違ッ
 て仰しやるやら、ハ、ハ、ハ、ハ、とところで宇野屋さんこりやア私が多年出入の或る大家から頼
 まれて、匙の外は御免蒙るとも言はれない義理でね、實は迷惑ながら、兎も角、そつと内々

で承はりたいのさ、御量見を『へい、何事で御座いますか』外でもない、打割ツて申さば、
 さる大家の御主人がね、ふいと娘御を見染て矢も盾も堪らず、是非とも懇望したいと言はれ
 るのさ勿論、娘御が望み通りの衣裳萬端から頭髮粧飾に至るまで、金にあかして拵へた上、
 また時と場合で、もし御商賣の方に希望でもあれば、ついでに資金も用立て御力にならう
 といふのさ、ハ、ハ、ハ、ハ、つまり世の中は宇野屋さん、佐渡の名物ですよ、ねエ、第一に娘御
 の出世『どなた様かア存じませんが、私風情の娘に、さやうな御大家から、しかし子と申し
 ては、外に同胞も御座いませす、唯あの娘一人で』そこが宇野屋さん考へ者だよ、なるほど
 家にとつて一粒種とはいふものよ、男なら格別、いづれ女の子は婿養子でせう、その他人か
 ら来る婿養子が、よく世間に例のある事で、うまく當れば宜いがもし、運悪く妙な奴にでも
 這入込まれた暁は、つまり大事の一人娘を疵物にした上、折角の身代めちやくくに踏潰され

て一句もない結果いほど差引勘定の合ない理由でハ、、、それよりは、いッそ今のうち、幸ひ運の向て来た汐合を外さず、金といふ便利なものを養子に如何ですな、つまり娘御の身體を出世のため先方へ遣ッて代りに入來る正金を其まゝ家の跡取にするのさねエ宇野屋さんハ、、、忽ち見る光彩の門戸に生ずといふ古人の言だ『いや、いろくくと段々の御親切、何とも御禮の申上げやうは御座いませんが、今こゝで御即答も致しかねます、しかし先方様は何といふ方で御座いますか、そツと内々お洩しを『ハ、、、即答を聞かないうち、打明すのも少々濟まない理由だが先方が先方だから却て雙方のため、結果が早いかも知れない、實は宇野屋さん、御商賣柄の水上的の柏木の御主人ですよ茅場町の』

大きくや否、宇野屋庄兵衛おもはず兩眼を見張ッて居坐を立直せしが、元來の、分別男、わざと靜かに言葉を和らけつゝ眉を擧めながら『なるほど茅場町の柏木といへば同商賣の天下取、

身に取ッて此上もない冥加には存じますが、時に先生、あの御主人は三十以上の御年輩、かつまた餘りの段違ひこりやア四海浪しづかに公然の嫁に呉れと仰しやるのでは御座いませんな『ハ、、、さう改マッて四角う出られては少々困るが、柏木の今の御主人は好奇で、これと定まッた御本妻のない事は世間でも承知してゐるから、別段、妾といふでもないよ、よしまた妾といはれても、これほど執心の娘御、外々の女より格別お氣に入るは必定、聽て其まま御本妻に直れるよ宇野屋さん、名より實だ、とかく浮世は損得の戦鬪場、むつかしい理窟を抜いて相談にあづかりたい、ハ、、、』

匙の先で病人を殺すのみか、無事息災の人の娘まで口端で殺す此藪醫者め、とは思へども宇野屋庄兵衛、腹に一物、じツと堪へて膝を進め微笑を含みながら『承はれば猶更ら、すぐにも飛附いて御取持を願ふ筈で御座いますが、あとで本人の否應あッては御迷惑をかけます道

理、ついでには今夜よく娘に申聞けまして得心させました上、あらためて伺ひます「や、早速の承知で雙方めでたいどうぞ十六の娘御、恥かしいが先で、きつぱり返答の出来やう筈がな
いから、そこは宇野屋さん、親の腹でな、しかし一應は本人に、いや道理なところだ「何分この上とも宜しう願ひます」

丸裸より自己が腕一本に仕上げたる身代ならば兎も角、鑛山に湧た蟲に等しく親譲りの小判で光る奴が何の糞、まして世間の義理も人情も踏潰して日夜非道の榮華に誇るのみか、あるのみに任して當るを幸ひの妾狂ひ、彼奴の色狂氣は今に始めぬ事ながら、どこの牛の皮か馬の皮か浮世を張拔の太鼓醫者に言含めて、相手も相手にこそ依れ この宇野屋庄兵衛が秘蔵の一人娘を金銭づくで慰まむとは、畜類め、外道め、

さらぬだに平生の怨恨ある柏木傳右衛門、此ま躍り込で腰身の淫亂骨を踏碎いてくれむかと思ひしが、憎さも憎し、あまりの憎さに庄兵衛おもはず腕を組で一思案、さてよ、待て待ておのれ、さて暫時、

人しれぬ腹の底に一物ありとも知らず、病人の脈より人の身代の脈を窺ふ半田幸庵、あくる日の朝めくら威喝の乗物にも乗らず入來りて、折しも店頭に居合したる庄兵衛の顔を見るや否、まづ輕薄の空笑に會釋しながら「ハ、早速ながら例の一件は、御返答次第で、これから直ぐに先方へまゐりたい「これは先生、まア奥へ「いやく朝のうちには互ひに迷惑、此ままで宜しい、時に娘御は「何分、まだ小兒同然で御座いますから、しかと得心したといふま
では、まゐりかねますが親の爲と申せば、さのみ不孝の生來でもない女、まづ兎も角「お
ツと出來た、その邊で重覺、善は急げだ早速先方へ返事に行きませう、とこゝろで宇野屋さん

いふまでもなく、一方の希望があるだらうな、ついでに幾何くらるといふ大體の高をちよいと
 内々で『へい、有難う御座います』これも早いが良い、相手は掘抜井戸で底なしの柏木だ、
 つまらない外面を張って遠慮するにも當らない、勿論、如才もなからうが一割といふ拙者の
 分を込めて置いて貰ひたい、ハ、ハ、ハ、ハ、『なか／＼先生も油断のならない娑婆ツ氣が御座いや
 すな、ハ、ハ、ハ、ハ、』まだ五十四だ、今から佛氣を出して堪るもんか、ところで委細は後刻、と
 も角も例の金額を、どのくらゐ、あとで彼是は面倒だ、先方の笑顔に研込む呼吸もあるから
 前以て、どれほど宇野屋さん、打明けたところを承はりたい』いはど娘の價格どれほどと問
 はれて流石の庄兵衛俄かに何とやら赤面の體、暫し無言のまゝに差俯きしが、やう／＼思ひ
 切つて顔ふりあげ、兩手を擴げながら幸庵の鼻頭へ突出しぬ『先生、これだけ、願はれます
 まいか』むゝ兩手を廣げて十本の指、無論百の字だな』ちと厚顔しいかとも存じますが、先

生、お察し下さいまし、一人娘で御座います、あとに同胞はなし』いや道理、相手が相手だ
 決して高くはない、百の字、心得た』何分とも宜しう願ひあけます』

茅場町の柏木が奥座敷、主人の傳右衛門は床柱に寄りつゝ、しきりに打鳴す太鼓醫者の幸庵
 に對うて満面の笑を浮べながら、『御苦勞／＼、しかし、かうも容易う出来るとは案外、さて
 さて世の中は金だな、あの庄兵衛といふ奴、まんざら知らない間でもなし、ちと難物に思ッ
 て二の手の三の手と工夫まで備へて置いたが、ハ、ハ、ハ、ハ、外貌ばかりで内證の脆い男、ころり
 と初太刀で往生したのが、今更ら可哀さうだ、また百兩といふ音も思ひの外に弱い吹き方、
 よく／＼苦しいと見えるな』なアに貴方、御當家から百兩といへば端た金で御座いますうが
 世間普通では全くの大金、それも君傾城に賣ではなし、第一が本人の出世に御座いますもの、

せて置くんだ、氣を附てやれよ、妻娘も居ながら」
 廣くもあらぬ店と奥、女房きよつけて戌松を呼べば、娘のお蝶も針と糸とを持ちながら、こ
 れ戌松こよへお出で、ちよいと縫てあけるから、何おッ母さん、妾が縫ッてやりますよ、お
 父様に叱られないうち早くさ、菊は今、御飯を炊てるから、いけないんだよ、あれ、おッ母
 さん、臺所の方へ遁込みましたよ、ホ、ホ、ホ、」
 折しも店頭へ料理屋の下男めいたるもの一封の書状を持来りしかば、主人庄兵衛、何心なく
 受取て讀下しつと、委細承知、早速参上との口返事しながら、常著の上に羽織ひツかけたる
 まよ「ちよいと出てくるから店に氣を附けなよ、戌松、おい戌松、もし用があれば永代橋の
 岸本といふ會席料理へ呼びに来るんだよ」
 北新堀よりは五町に足らぬ永代の橋際、ほどなく岸本へ行けば、庭傳ひの奥の小座敷に待受

けし半田幸庵「さア宇野屋さん、すつと此方へ、ともかく前祝ひの一獻さしあげた上で、ゆるゆ
 るお談話をするから」わざく、かやうな家へ、お招きにあづかつて恐れ入ります「いや、恐
 れ入らずとも實は此方で御馳走になるやうなもんだ、ハ、ハ、ハ、まづ一獻、時に例の事、今朝
 あれから直ぐ先方へ駈付けて委細を演べたところが、案に違はず床板が抜けるほどの大満足、
 是非、今夜にも言はれたがね、まさか、さうもなるまいから、いよく明晩といふ事に取極て
 来ました、勿論、如才なく一方の約束を固めて置いた證據に、まづ半金、只今これに持参といふ
 段取り、ハ、ハ、ハ、いろいろ御骨折、早速の御効果で有難う存じます、もう斯うなれば先生、
 外見も虚飾も取って退けて伺ひますが、その半金、只今御持参下さいましたので御座います
 な「いかにも懐中に持参、だが宇野屋さん、最初の約束この半金に就ても一割だけは引てあ
 るよ、ハ、ハ、ハ、いやこれは御手廻しの早い事、しかし宜しう御座いますとも「それでは

醉はないうちに半金お渡し申さう。時に先生、ちよいと伺ひますが、うらの空地へ十坪の二階家、しかも成るべく木口を選んでの、御普請は何時ごろからで御座います。ハ、ハ、ハ、宇野屋さんも外面に依らない人が悪いよ、際どいところへ斬込で商賣氣を出すもんだ、ハ、ハ、ハ、空地はあるが空金が御座らん、實は此一件に就て足下を呼寄せむがため一時の權謀でな、しかし半田幸庵、いつ何時、運が飛附いて来て家臺骨を擴げるかも知れないから、其時あらためて御相談いたさう、ハ、ハ、ハ、まづそれよりは差當つて福の神の受渡し。半田幸庵、目を閉ぢて懐中へ兩手を差入れながらやがて取出したる五十兩、しかも百兩に就て一割の十兩この半金に五兩を差引いて小判四十五枚、庄兵衛の前に、數あらためて押並べぬ、宇野屋庄兵衛、じろりと見たるのみ、手にだも觸れず、眉を擧めて幸庵の顔、今更ら穴のあくほど見入りながら「先生こりやア何です」「何、何といふ事があるかね、今いふた約束の半

金、つまり、五兩を差引いて四十五枚。ハ、エ、四十五兩が約束の半金とは、百兩の半金で五十兩さ、ところを一割引の半金で四十五兩さ。むこりやア少々目的と違ひました。何故、なぜ違つてる、兩手を廣げて拙者の鼻頭へ突出した十本の指、しかも百の字だなど念を押した百兩。ハ、ハ、ハ、指一本を十兩と見積つた百の字ぢやア先生、大分に違ひます。ふむ。今更ら妙な事をいはれる、さては一本の指を百兩にでも立てたのかな。いや、まだ少々、勘定が違ひますよ。はて、それぢやア百の字を全體、どう立てた心算で。兩手を廣げて十本の指、一本が十萬兩、つまり百の字は百萬兩。えッ。こりや藪醫者、ずつと出い。

兩手を廣げて鼻頭へ突出した十本の指に百の字とは百兩と思ひの外、一本の指が十萬兩、たつた百萬兩と聞くや否、半田幸庵アツと呆れて驚いて言句も出でず、たゞ目を丸くして口を

尖らしながら、鳴損ねたる小田の蛙に等しき頭上より、大喝一聲この藪醫者めすつと出いと叫ばれて二度驚愕、額越に見上ぐれば宇野屋庄兵衛が憤怒の顔色、鬼に似たり、
 「そと其、そりやア宇野屋さん、今更、そんな無理をいはれては、何、何が無理、相手が掘抜井戸で底なしの柏木遠慮におよばぬと前口上のあつた鼻頭へ、さらば一本十萬兩と見積つて出した兩手で百の字の百萬兩どこに無理がある、瘦せても枯れても一軒の主人、この年まで他人の尻舞に乗て追従輕薄の鼻息も出した事ない宇野屋庄兵衛が秘藏の一人娘、どこから割出した算盤珠の百兩か其理由を承はりたい、事の成る成らぬは俵置で、もし其理由が立たずば仲人の汝を引ッ提けて茅場町へ押掛け、あの色狂氣の柏木めに一泡吹かす覺悟の庄兵衛、北新堀に三間まぐちの外見男と思はず、サアあるだけの胸臆を据ゑて返答せい、人を殺しながら藥禮とツテ濟む場合と、少々違ふぞよ、この筈め、いや御道理、御道理では御座るが、

さう一口に噛み附かれては、どうか氣を靜めて、この幸庵が申上けることを、なるほど、御秘藏の娘御を僅か百兩と早合點いたしたは拙者この上もない重々の過誤ながらまた百萬兩とは餘りの呼聲、いかに大家とは申せ柏木の身代あのまゝ底を叩いても覺束ない金高、こりやア最初からの御立腹で、ならぬを承知の御相談で御座いましたな、お腹立まぎれに一ぱいの沸湯、知れた事を言へ、百萬兩は俵置十萬兩でも血を分けた現在の一人娘を金で賣る宇野屋庄兵衛と見たか、ウンといへば九尺二間の裏屋から拾ひあけた素丁稚の嫁にも遣るが否といへば大名高家が鉦打乗物で迎ひに來ても一切不承知、まして白痴面の柏木傳右衛門、その淫亂骨をいたぐく半田幸庵、二人とも改めて敵手に取るぞツ、何といはれても一言なし、御覽の通り禿頭を疊に摺附けて、たゞく謝罪入るの外はない始末なれど宇野屋さん、こゝを察して貰ひたい、なるほど本人柏木に對つては兎も角、いはど多年の出入で退くに退かれぬ

義理合から無理往生に頼まれた取次の幸庵まで「ハ、ハ、ハ、もし出来た曉と自己一人の手柄願する奴に限って、出来ない半途の遁仕度ハ、ハ、それほど多年の出入で退くに退かれぬ義理台なら猶の事、卑怯に今更遁隠れせず立派に引受けて柏木もろともこの庄兵衛を相手にせい、年が年中、齒にも觸らぬ豆腐のやうな奴ばかりを一口に喰ひつけた願には、ちと骨のある固いところも一興だ、ハ、ハ、ハ、先生いよくお手前もんの外科療治が入りさうな場合になりましたな」これは御言葉、なほさら恐れ入りました次第、で、いやはや、幸庵め、何と御詫を申上げて宜いやら、ひらに此通り、只この通り、しかし宇野屋さん、どう致せば御立腹が治まりませうか、この上は何卒お指圖を願ひたい「ゆすり欺偽でもない宇野屋、勿論、金銭づくは一切無用、また親兄弟の仇敵でもない町人の身で刃物三昧は致さぬ、その外で柏木と額を合した上、これならばと思つたところを出して見なさい、きく聞かぬは此方にある事」を其

處を何卒、うちあけてどうか思召のあるところ「ハ、ハ、ハ、なるほど、それほど疊へ摺附ける禿頭を真正面から踏潰しても詮ない事されば注文いたさうが、まづ本人の柏木傳右衛門に麻社杯を著さして足下が附添ひ、謝罪證文一札持参の上、この庄兵衛が店頭まで改めて來れば、ならぬ堪忍袋の紐を縫ひませう、その他は誰が何と言つても吐しても宇野屋庄兵衛、きかぬ氣の男、金輪際、否だ」

すつと其まよ起て見向きもせず、まづ暫時と袖に取纏る幸庵の手を拂うて、疊さほりも荒めす靜かに歸り去りぬ、

宇野屋庄兵衛に手盛の一ぱい焼いところを喰されて、咽喉佛の煮返るほどに驚いたる半田幸庵、呆れ返つて其まよ茅場町へ馳行きつよ、柏木の面前に禿頭を振立てながら委細かくと告

ぐれば、世間見ずの我まよに育ちたる傳右衛門、おもはず目を丸くして片手を伸すや否、差出したる幸庵の坊主額びしやりと叩きぬ、
 迎も一筋縄ではゆかぬ奴と知りながら、あまり見透たる彼奴が内證の手薄に現在百兩といふ金の勢ひ、こゝが浮世の本音、まさか二の矢のあるべき術とも思はざりしに、思ひの外に脆い男と冷笑ひしは思ひの外に太い奴、うまくくと我を吊寄せて鞠に取て嚙で吐出したるのみか、江戸一番の材木問屋、しかも木曾を一手の柏木傳右衛門ともいはるゝ我に、やうやう三間まぐちの木屑竹屑を並べたる店前へ麻社袴を著けて謝罪證文一札持参せよとは、吐しも吐したり、よくも吐したるかな、もはや此上は是も非もなし、高の知れたる北新堀の小家店、たど一息に踏潰してくれむ、深川の木場に建聯ねし庫の隅より三尺角の節なし檜を八九本なにもものにして戦へば、木葉商人の宇野屋庄兵衛を丸裸にせむこと掌中にあり、ついでに思ひ込込たる彼奴の娘、否でも應でも奪取り引縛つて自由にする工夫もありと、またもや勢ひに乗つて幸庵の坊主頭びしやり、以後出入無用、

七年前の丸焼を五層倍十層倍にして取返さむと、人しれぬ肝膽を砕いて日夜に立働く宇野屋庄兵衛まして元來が鼻頭思案の下司にも生れつかぬ男一疋、いかに浮世が苦しく内證が迫ればとて、現在おのれが血を分けし秘藏の一人娘を金錢に賣らぬは勿論、もし他人ならば一言の下に跳付けて取合ふべき筈はなけれど、相手を柏木と聞ては流石狂氣め、おもふまゝ浮して置いて鏢際の一息に一泡吹かしてやらむとの一物、固より承知の百兩を百萬兩と打出して仲人に立ッたる半田幸庵を驚かし、本人の傳右衛門に麻上下著けて謝罪證文一札持参せずば、覺悟せい、何としても聞かぬ氣の男と喚きながら、その實は商賣の片手間まで缺て斯る無法

の白痴に無用の時刻を費すべき心はなく、たゞ一時の翻弄半分、腹癒半分、平生の我まよ三昧に人を人とも思はぬ傍若無人あの傳右衛門めが一ぱい喰うて火のやうに怒り出した面相、入らざる追従輕薄に野太鼓を打損ひし藪醫者が禿頭に嚙付かれて俄に不首尾の顔色、目に見るやうな面白さ、少しは溜飲の下りし心地と、妻子を前に晩酌の酒一合おもはず飲過しぬ、折しも店前の方に當りて破鐘の如くに響き渡る大聲、また戌松が頻りに叫ぶ聲、妻子よりも庄兵衛まつ眉を擡めつゝ、何事ぞと飲みかけし盃を置いて其まゝ立出づれば、雲つくばかりの大兵肥滿それも其筈なり櫓落しの大髻に五所紋の黒羽織を著流しながら銀づくりの脇差を横へたる關取分、これに従ふ弟子相撲の前髪三人もろとも、廣くもあらぬ店頭に立塞がッて戌松一人を取圍みし體、宛がら荒鷲に規はれたる小雀の如し、庄兵衛、はッと驚いて其處に飛出しながら、兎も角まづ戌松を吐り付けて仔細を聞く間もな

く 忽ち頭上より雷の如き聲「やい、汝が此家の主人か、ちツくら前へ出ろ」

はや店を仕舞うて夕陽前に心せくまよの打水、柄杓の勢ひ誤ッて往來の人に飛沫のかよるは往々あること、まして十五に足らぬ小腕の狂ひ、固より心ありての業ならぬに、鬼をも挫ぐべき天下の力士が三人の弟士もろとも取圍んで、今にも掴み殺さむかと思ふばかりの猛威に主人の庄兵衛が驚いて飛出すや否、さらに曲直ッて家内に響き渡る大聲、やい汝が此家の主人か、ちツくら前へ出ると叫んで店頭へ腰うちかけぬ、

「いやはや、何とも濟まない事を致しまして、しかし御覽の通り、まだ乳臭い奴で加之も根が少々足りない田舎生來で御座いますから、どうか私に免じて、おい戌松、何のこッた先方様も見ないで、馬鹿め、あらためて謝罪を申上けろ、あれあの通り頻りに謝罪ッて居ります、

お弟子衆、どうか關取へ宜しく御執成を願ひます、これ誰か奥に居ないか、お茶でも持て來い、いやい待て、茶も湯も欲しくないぞ、但し此場を茶で濁さうといふのかい、こらよく聞け、吹けば飛ぶやうな蚊蜻蛉野郎が、ちよこくと小走りに駈出す途端なら、また手元の狂った杓の勢ひ、なるほど、過誤のないにも限るまいが見ろ、この大きい圖體で大道の中央、のツさくと地響うツて通る男へ、わざと掛けない水が何として掛るぞい、さア量見ならねエぞ、時も時、今年の五月場所が伸びて此頃やうく、あすは兩國本場所の初日で、牝犬に逢つても汚穢を恐れて片寄る天下の力士が面へ、豆のやうな素丁稚が雑巾あまりの濁水ぶツかけて濟むと思ふか、名は貧乏神でも福の神と取組で幕へ跳込まうといふ出世前の鯨が峰だ、承はれば尙更ら何とも以て申譯のない次第で、こりや成松、うろく、其處に居ちやア反て關取のお目觸りだ、早く、早く何處へでも行け馬鹿ツ、や、この野郎、生證據の本人を遁して置いて、

逆捻に木戸を突く量見だな、面白い、どう致しまして、たとひ居りましたところが、ますます御機嫌を損じるばかり、私が當家の主人で御座いますから、むよ今更ら、あらためて當家の主人と名乗るからは、この鯨が峰を相手に引受けて一文句あるらしい面相、これは迷惑な次第、ものゝ假令が關取と私が振替つたところで、高が十五に足らぬ素丁稚の手が狂うて、目のない柄杓の中から風で散つた打水の飛沫、かういふ今、どこに痕跡の附たといふではなし、申さば出合頭に不意の出來事、ハ、ハ、ハ、まして男家業の水上ともいはるゝ關取が、いやいこの野郎、妙に舌の先を舞して物言の乙に搦んだ奴だ、うぬの方に手落ありながら手前勝手の逆捻文句、柄杓に目がなうて出合頭の兩過誤とは何のこつた、どこに今かうといふ痕跡のないを僥倖、無證據にする氣か、いよく勘辨なんねエぞ太い奴だ、さア覺悟しろ、小山の動き出すが如き大兵肥滿、そのまゝ店の中央に這上つて床板の抜けむばかり、どツか

と大胡坐の體に、いつしか見物の人浪ざはくくと立騒いで、ありや鷺が峰、茅場町の柏木が出入相撲と呬語く聲を、主人の庄兵衛に叱られて其場を立去りながら、そつと人混に隠れて様子を窺ひし戊松、小耳に挿むや否、忽ち大聲張上げて叫びぬ「やア柏木の抱相撲だ柏木の關取め、疊の上で威張つて土俵で負けるない」

今まで五體を縮めて頭を垂れし庄兵衛、おもはず耳を敏て顔を振上げながら、達摩に似たる鷺が峰の面體、じろりと見上げぬ「ふむン、足下は茅場町の柏木が冷飯で肥つた相撲取か、瘦せても自前で喰つて来た宇野屋庄兵衛、あらためて挨拶する、幸ひ黒山のやうな見物衆、御迷惑ながら後の證據に立つて末の落著まで見て居て下さい」

またもや見物の中より聲あり、されど今は戊松にもあらで、誰かは知らず強きを挫いて弱きを救ふ江戸氣質、おもはず相槌を打て喚きぬ「相手の圖體に驚いて退を取るな、確實な證據人に立つたぞ、やい素人威喝の化物め、手でも出すと聞かねエぞツ」

天下の力士ともいはるゝ關取分の鷺が峰、吹けば飛ぶ素人を相手に土俵の外の力業もならぬは、固より承知、たゞ動きの取れぬ一文句を残して置いて、あとは弟子の前髪相撲に居直らせ、生命にかゝらぬほどの片腕か片脚、へし折てくれむと思ひしが、折しも夕陽前の往來繁く忽ち店頭に見物の山を築いて、其中より柏木の抱相撲と叫ばれたる一言は兼て謀策の身に取て露現の基、しかも其聲きくや否、さてはと俄かに胸の一物かまへて幸ひ黒山の見物を證人に立てながら詰寄つたる庄兵衛の猛勢に、流石の鷺が峰も今更手を出すべき機会を失ひ南無三寶仕損じたりと思へば猶更ら逆捻に捻出す相手を持餘しつゝ、やう／＼覺えて居れの一語を残して其場を立出れば、どつと背後に笑ふ見物の聲、やア關取残つた／＼相手が無事に

残ったぞと叫びぬ、

相手の庄兵衛は固より高が夕暮の蚊柱に立ッたる十人二十人片手の握拳を固めて一撃に打斃すも易き業ながら、力は剛けれど江戸中の最負を客筋に持つ見物の前では弱い家業、傳へ傳へて素人威喝の名折を取ては出世前の土俵に立たれじと、其まゝ手足の筋骨を撫でて立去りしが、歩みながら三人の弟子を振り返へりて私語きぬ『あの野郎の面、よう覚えて置けよ』庄兵衛おもはず鷲が峰を見送ッて店頭の見物に會釋しながら奥へ入れば戌松いつしか裏口より立廻ッて待受けつゝ汲で差出す茶の氣轉に、満面の笑を浮べぬ『ハ、ハ、ハ、ハ、うまい呼吸で聲をかけたね、彼奴を柏木の抱相撲といふ事、どうして知ッた』へい、實に濟みませんこッて、しかし何も私が『いや分ッてるよ、杓の水が掛ッても掛らいでも、何とか吐ッて聲を持ち込む奴』私も最初は存じませんが、見物同士の私語を聞きましたので『むゝ全くの氣轉だ』

『また、あの見物も半分は私が呼寄せましたので、旦那に吐られて店を飛出した時、辻で大聲あけて、相撲取の喧嘩だ〜と一生懸命に吐鳴りましたから』ハ、ハ、ハ、ハ、いよく面白即智だ、しかし、もし彼奴を柏木の抱相撲と知らない時は、どうする量見だッた』へいなるだけ大勢の見物を寄せて置いて素人いちめの出来ないやうにした上、お町内の五人組か、お年寄の家へ半泣に驅込で、うちの旦那の急場これ〜と御挨拶を頼む心算で御座いました』で出来た、乃公が鑑定に違はず出来た奴だ、妻女、早く戌松に夕飯を喰してやれ、すぐ連れて行くところがあるから、おい早く仕てやれよえゝ乃公が膳の上にある菜を其まゝ附けてやれといふに』

文句ありといへば我より押掛けて山ほど文句あるべき筈、されど無法の白痴に二度まで取合ふ暇なければ、其まゝ打捨置くを僥倖とも思はず、おのれが非道を執念深く押通さむとする

男 山

ます事で、勿論、親方の手の中で煙草一喫の間に済むべき御依頼、御挨拶、痛み入ります、しかし、この玉垣が手の中で済みます事なら、二段目に鷺が峰といふのが御座いませうか、あります、去年の春場所までは幕下の細字でしたが、その年の五月場所と今年の一月場所に働きました、今ちやア貧乏神に据って居ります、しかも彼奴は私の身内で佐渡が嶽といふ年寄の弟子でな、これは幸ひ、實はその鷺が峰の事に附きまして甚だ迷惑な儀が、むゝあの野郎のために御迷惑、どんな事か知りませんが、何分、少し芽の吹て出た若い奴等は、をりく勢ひにまかして前後の差別もなく、酒など酔喰って、つまりは自己の爲になるお素人衆に威張たがるもんでな、ハ、ハ、ハ、ハ、無調法でもあれば、この玉垣が御詫いたします、また御勘辨のならない事でもあれば、野郎、とツちめて以後を打懲しませう、何、それほどの儀では御座いませうがあの鷺が峰は茅場町の柏木に何か、深い因縁で

も、「いや、縁も何もありませんが、あの柏木さんの手代衆に従弟があるとかで、つい自然と旦那の御最負をいたゞいて、多年お出入を仕て居ますが、お談話の工合ちやア何だか大分、混入ツた事のやうですな」

こよぞと庄兵衛おもはず膝を進めて、そもく七年以前に丸焼の時の怨恨より、去年御舟藏普請の満座で辱められたる事、さては近ごろ我最愛の一人娘を色慾の餌食にせむとせし事、野太鼓醫者の半田幸庵が事、果は今日の始末に至るまで、委細いちく漏さず演べ立てよ後「親方うちあけて談話申せば此通りの次第、しかし相手の柏木と此庄兵衛との間は互ひの勝手として、現在あの鷺が峰といふ相撲で飯喰ふ男、以後は一切この事に就て口も手も出さないうやうに願ひます、力業で押通る天下の力士に商人の店頭を踏躪られては、算算より外に藝のないものが親方、どうして、叶ひませう、第一が本人の不爲、これからが出世といふ折角

の首途に、無理も非道も辨へず賤しい金銭づくで丸裸千貫の太の身體を汚して、吹けば飛ぶやうな素人を相手の喧嘩腰、ハ、ハ、ハ、ハ、つまり鷲が峰一人でなく天下の力士總體の名折かと思ひます、もし金銭づくで土俵の外の相撲を取るなら、相手が二段目の貧乏神、此方も及ばずながら瘦身代を賭けて幕内の關取に頼み込み、随分、番附外に面白い勝負も仕て見ませうが、それでは却て雙方の白痴と思ひ、わざ／＼斯うして夜分も願みず、親方へ願ひに來ました」

玉垣額之助、大胡坐のまゝ兩眼を閉ぢて腕を拱きしが、やがて首肯て吞込だる體「いや、よく分りました、あの鷲が峰いかにも太い野郎です、よろしい、きつと呼附けて折檻した上、お望みとあれば佐渡が嶽もろとも改めて御挨拶にも差上げませう、また段々とお談話を承れば、柏木さんも御家柄に似合ない事、及ばずながら玉垣額之助、ついでに此一件も雙方め

でたく和睦のなるやう扱ひませうかな「いや、御親切は難有う御座いますが、今いふ鷲が峰さへ以後を取締つて下さいませすれば、何の親方、身代が太いとて家庫が大きいとて、ハ、ハ、ハ、どうか只今のことだけ宜しう願ひます、しかし鷲が峰も多年の出入場その柏木のために仕たこつてすから、あまり出世に觸らぬやう、お手加減を柔かう、つまりは本人の爲になるやう、ねエ親方、たのみます「や、いかにも能く分つた方だ、その邊の御心配も野郎に篤と申聞けます「もし萬一、本人の鷲が峰が居合すかと思つて、私方の本人、今日の源因の素丁稚を召連れましたが、ハ、ハ、ハ、ハ、もはや御挨拶もさせず此まゝ引取ります「いや御念の入つた事で、ハ、ハ、ハ、ハ、」

草臥た宵寝の寢返よりも易い事、何の手間も暇も入るべき、高が蚊蜻蛉に等しき小商人の宇

野屋庄兵衛、たつた一捻りと思ひの外、わい／＼騒ぐ店頭の見物人を幸ひ後日の證據に立てて自己が身の後盾としながら、俄かに居直つて此大男に山椒の小粒、ひりよと喰したるのみか、時も移さず急所を覗うて、人もあらうに玉垣が懐中へ飛込み、折も折とて今日から出世相撲の本場所といふ加之も初日の朝、この鷺が峰に目の玉の飛出すほど叱咤を喰したる奴、なるほど一筋縄ぢやアゆかぬ野郎でござんと、其日の立合に敵と組むまもなく砂を攔んで負けたる事まで今朝の不吉に假託て、柏木の面前に鬼齒を嚙鳴しつゝ怒れば、傳右衛門も思はず拳を握つて、坐せる儘の膝頭に音高く聲を叩きぬさア此上は金だ、玉垣額之助を呼で來い庄兵衛めは其次の事、

金が夜啼の茅場町とて當時の柏木傳右衛門が勢ひ、忽ち駕を吊らせて玉垣を迎ふれば、本場所の初日に打出しの櫓太鼓もろとも今しも家に歸りし額之助、おもはず眉を擡めながら前夜あの人に頼まれて今朝あの鷺が峰を叱り附けたる今、その柏木から我に來よとは、何とやら仔細のありさうな事、はてと小首を傾けつとも、名に聞えたる大家といひ、をり／＼招かれて酒宴の席にも出でたる手前、其まゝ其駕に飛乗つて急ぎ行きぬ、

玉垣額之助、案内に引かれて奥座敷に打ち通れば、壁押への金屏風に照渡る燭臺の火を點し聯ねて、前には積上げたる山海の珍味、左右には酌に立つ侍婢の美女三四人、背後の床柱に身を寄せながら主人の傳右衛門、満面の笑を浮べて持てる盃ぬつと差出しぬ「さア、むづかしい挨拶は入らないから、まづ一ぱい飲め、ハ、ハ、ハ、有難う御座ります、何の御用か存じませんが、お召に依つて早速『およよくきてくれた、兎も角、飲めよ相變らず底がなからう』どう致しまして、御客様方の思召とは違つて、相撲取が土俵を退きました後は、いやもう萬事がらりと打つて變つて、いけません、申さば一時に無理をして身體を拵へ過ぎた故で

御座いませうか、まるで貴方、お素人衆にも劣つた俄の弱り方で『でも器用が大きいから、飲めないといふ事があるもんか』へいちやア申譯に戴きますが、どうか御用の筋を、甚だ勝手がましい事を申上げて恐れ入りますが、御承知の通り今日が初日で、いろ／＼まだ遁れないう事を取残して伺ひましたから『忙がしい中をわざ／＼氣の毒だが、時に玉垣、あの北新堀に住でる宇野屋庄兵衛といふ男は親交かな』別段、親交と申す譯では御座いませんが、前夜、ふと私の宅まで来られました、思ひ出せば七八年以前に二三度お目にかかりました御人で『では今、さのみ親しい間柄でもない奴の爲、現在、自分が身内の弟子中で加之も此ごろ芽を吹た出世前の鷺が峰を、時もあらうに今日といふ本場所の初日早々まして朝の起抜に吐り飛さいでも宜からうと思ふがね玉垣、折角の立合に氣を悪くして思はぬ砂を擲んだのだ残念だと、前刻も乃公が前へ来て男泣に泣て居つたぞ』へい、お召になりました御用は、その

事で御座いますか、鷺の野郎め、けしからん奴で、たとひ腹の皮が裂けるほどの事あつても平生お目かけられる旦那の前ぢやア、男家業にツこり笑つて御挨拶しろと常々から教へて置きましたに、うぬが垢を隠して白々しい吐し方、御恩に甘へて土俵の上の勝負まで彼是、太へ奴で御座います、外々の懲戒に畜生今度こそ脛腰の立たねエほど『いや玉垣、そりやア少少理窟に合ふまい、よし鷺が峰どれほどの悪い事があるにしろ、坊主頭から育てあけた可愛い弟子だらう、それを十年近くの間たつた一度か三度より逢つた事のない奴のため』なるほど一應は御道理のやうで御座いますが、御最負は御最負、また相撲には昔から相撲の習慣と筋道が御座いまして、恐れながら此事には一切、誰彼様でも御一言の御指圖は『むよ改まつて玉垣、むづかしい事をいふな』いや決して、別段、むづかしい事を申上げるのでは御座いません、結局、あの鷺の野郎が白痴から起つた事、どんな深い仔細があるにしろ、相撲取が

貴方、お素人を相手にして喧嘩腰になるといふ事が御座いませうか、蚊の脛から育てあけた身内の弟子なればこそ、猶更ら此玉垣額之助が量見いたしましたので、十年に一度か二度やうやうお顔を見たばかりの方でも、毎日毎夜の御酒宴に招かれて絶えず御恩を蒙る方でも、お客様はお客様、隅から隅まで大江戸の御人氣をうけて櫓太鼓の音高く繁昌いたします相撲道の中に、素人威喝の化物があつちやア世間へ對して力士一體の申譯が御座いません、時と場合によれば貧乏神の一人や半分、土俵を禁じても我々總體の名折には代られません儀で『いや、もう講釋は其邊で置いてくれ、實は玉垣、いろくまだ打明けて相談する事もあつたがね、あまり鼻息が荒いので引込だ、ハ、ハ、ハ、ハ、ついでに鷲が峰も土俵から引込めるかも知れないから、その覺悟で『や、これはまた何と致しました理由で、何が御意に觸りましたか存じませんが、つい圖に乗って言葉の荒くなるは私どもの常、さう御短慮に『短氣は乃公が性質だ』

『へい、恐れ入ります』今更ら恐れ入らなくても宜いから、早く歸つてくれ、もう用はない』

さる大名の酒宴に招かれし時、おのれの上座に日本一の俳優ありしかば、そつと背後より小兒の如く軽く抱上げて其跡へ坐したる振舞、あまり角立ちて面憎しと、主人の殿が投付けたる銀の伸煙管を、兩手に掴んで輪に曲けたるまゝ、出入無用の聲を聞流して顔色も變へず靜かに立歸つたるほどの玉垣額之助、いかに大家とはいへ何として町人風情の柏木が鼻息を戴くべき、まして俄かに呼寄せながら自己の意に叶はぬとて手の裏かへすが如く、また忽ち俄かに用なしとて追返せし傍若無人の我まゝ勝手に、額之助おもはず眉を逆立てて走歸りぬ、前夜訪來し人の片言ばかりでは、まだ心の底に嫌疑を抱きしが、今こそ始めて讀めたり、されど我身にかゝらぬ相手と相手、口も手も出すべき場合ならねど、現在あの鷲が峰は蚊の脛

より育てあけたる身内の飼弟子、その弟子の不所存を師匠筋の玉垣額之助が吐りしとて客筋の柏木が何の文句あるべき、まして斯道の元締支配をもする我弟子分より力士總體の名折となりては濟まざる事と、第一は本人のため猶更ら強く戒めたる心も知らず、あの白痴奴が客に泣込で自己の本業を忘れしのみか、その白痴を受込で我を呼付けながら一言の下に踏み濃せし上、しかも天下御免の本場所が驚か峰たど一人で立つかの如く江戸全體の見物は柏木たど一人で濟むかの如く、以後は相撲も見ぬぞ驚か峰にも土俵を退かずとは、面白い、久しぶりで臍が茶を沸したと大口あいて高笑ひしながら「おい誰か驚か峰の野郎を呼びにやれ、もし居なきやア明朝の稽古に來た時、ちよいと乃公に知らせろよ、畜生、ふざけた奴だ」東天に打出す櫓太鼓の音、兩國の川に響いて回向院の空も暗れ、はや部屋々々には頻りに吼ゆる稽古の力聲、をりしも玉垣の前に呼出されたる驚か峰、今を壯盛に山の如き肩口も何と

やら狭き心地とする、おのづから膝を締め頭を垂れて手を支ふれば、額之助おもはず大胡坐のまよに座を進んでじろりと睨み、

「やい驚か峰、汝は今日も場所へ出る氣か、いやさ土俵へ上る氣かい」へい、親方、唐突に、妙なことを「妙な事を誰が言はすのだ、も一事、あらためて聞くが、汝、一人の客と江戸中の客と、どっちが身に取て大切だ、また其一人の客と盾にして力士全體へ反いても宜いと思つてるか、胸骨を据て返答しろ」どうして親方、其、そんな馬鹿な事を、おかけで今が一生懸命、大事の出世前ですもの、いくら何でも「だまれ、この野郎、その出世前だから猶更ら以て身のため、あれほど言ッて聞かしたを有難いとも思はず、うぬ茅場町の旦那場へ不足面を持込で土俵の上の事まで、かれこれ吐したちやアねエか、白痴め、十兩の筆頭は關取の中分その汝が素人相手の喧嘩腰になッて、それを吐られたがため其日の勝負に砂を掴んだとは

何のこつた、ハ、ハ、ハ、ハ、この呼吸を押しつけて唄った音だ、第一また汝が出入の柏木さんも案外、わからねエ御人だ、わざ／＼この玉垣を呼付けて何をいふかと思やア、さうさ方角違ひの矢を射かけた後、家臺骨は大きいが尻の穴の詰った小せエ量見、あの鷺か峰を今日かり土俵に出さねエとの御託宣さ、べらばう奴、長年の間、苦勞して育てあけた人の子に飴を呉れて、親のいふ事を聞くなア呆れ返った唐變木だ、しかし、時の飴菓子で親に反くやうな餓鬼は子に持て面白くねエから、鷺か峰、あらためて返答しろ、やはり此まゝ土俵に上る氣なら柏木へ出入無用だ、また今まで通り柏木へ出入するなら今日かぎり土俵へ上ること無用だ、いくら大家でも金持でも相撲道に取て一人の客、その一人客のため相撲道が自由にされて堪るもんか、つまり汝を此まゝ柏木へ出入さしちやア江戸中一體のお客様方に對して濟まねエから、さう思つて覺悟しろ、天下御免の力士を日本晴の中央で取扱ふ玉垣額之助だ、片田舎の草相撲を振つて歩く老耄にならねエ以上、金色の光輝を惣身に浴びても曲つたこたア一切禁物、生れついた腹の蟲が承知しねエわい」

おのれが身の過失を忘れて上みぬ心の鷺か峰、二日つゞいて玉垣に吐鳴附けられたるのみか、その二日目の取組にも我より下の相手に脆く抛けられたる腹立まぎれ、櫓落しの元結跳切るばかり怒つて土俵の外に怨恨の力足を踏鳴しつゝ、またもや茅場町へ走行きて柏木の面前に委細かくと告ぐれば、傳右衛門も今は退くに退かれぬ重ね／＼の意地まして、浮世を金で押切る横車の我まゝ根性におもはず拳を握つて、「あの玉垣め、十年に一度か二度、やう／＼顔見た宇野屋風情が口車に乗せられて、現在おのれが子飼から育てあけた出世前の弟子を踏潰すばかりか、男家業とはいへ根は愛嬌家業の身で客の言葉質を取て、柏木の出入無用とは、

よくも吐したさアこの上は鷺が峰、汝が生涯、相撲で取る給金の三倍五倍は呉れてやるぞ、あすから土俵を退け、しかし退際に置土産の一文句、きつと残して来いよ」

三日目の稽古場に鷺が峰の姿みえぬのみか、其日の土俵にも音沙汰なく、同じ部屋の者に聞けば、昨日の打出太鼓もろとも今に歸らぬとの事、玉垣額之助おもはず舌鼓を打て茅場町の方角を睨みながら「野郎いよく」白痴の結局を附けたな、畜生め、恩も義理も物の道理も知らねエ奴だ、砂を掴むより金を掴むが當世たア尻に手の廻らねエ鼻頭の猿智恵、今に見ろ、一時の圖に乗て無理を立抜く人の氣は秋の空、立寄った梢から雨が漏つて濡鼠だ、彼奴を馬鹿な手本に皆の者よく氣を附けて一生懸命に稽古しろよ、日本國中を客に持つ相撲取いくら大家でも分限者でも一人の客ぢやア身が立たねエ、百兩一封の華より絶えず一兩百封が眞

正の全盛だ、ハ、ハ、ハ、鷺の野郎、もし此後うろく舞戻つて面でも出すが最後、かまはねエ寄て集つて脛腰の立たねエほど打伸めせ、多年恩義の師匠に後足の砂ぶっかけて無言に同業を飛出した野郎、以後の懲戒だ、生命さへありあア片輪にしても大丈夫、乃公が承知だ、この玉垣が引受けたぞ」

幕下の筆頭、力士の貧乏神といへば武士に取て槍一筋の身分も同然、また鷺が峰の胸をいたたく小相撲もあり儲は平生より追使はるゝ三五の前髪もありて、大師匠の玉垣が四日目の稽古場に立出でつゝ吐鳴散せし委細、かうくと人しれず告げながら、今のうちに謝罪挨拶を入れて歸參せよと勸むれどもはや金庫を背追ひし心地の鷺が峰、冷かに笑うて上唇を舐めながら「汝達の親切は嬉しいが、どうも親方の氣心が嬉しくねエ、薬でしても木でしても幕下

の筆頭は天下に二人だ、その一人の弟子を、渡り奉公の權助か年期小僧のやうに親交でもエ人に頼まれて白痴の馬鹿の、いや打つの叩くのと、何のこつた、そんな分らねエ師匠は弟子の方から勘當だ、謝罪も歸參も絲瓜の皮もあるもんか、追出されねエ先おん出てやツたのだ、土俵に上らねエでも喰ふに困る男ぢやアねエ、江戸で五本か六本の指を折る茅場町の生錢樹が後楯だ、べらほうめ、踏まれて花の咲くなア春の小草だ、蜂は逆様に家を作ツても驚が峰は頭で歩くこと出来ねエから、出世前を打毀す親方の許へは歸れねエよ、アハ、ハ、ハ、ハ、さう思ツてくれ、ついでに言ツて置くが、もし親方の差圖で妙な事でもする奴がありやア猶更ら面白い、丸裸で土俵の上の勝負と違ツて生命を的の喧嘩勝負は別なもんだと傳言してくれ」

商人の小娘に似合す、つんと澄して自然に氣高き風情ありながら、また何處やらに滾ると愛嬌あつて加之も馴々しい振舞はなく、雪の富士額おのづから水際立ちて作らぬ眉毛いと情らしく、いき／＼と張切ツたる黒目勝の二重瞼、晝に描ける若衆鼻、眞珠に似たる齒を含まで固く閉ぢたる丹花の唇端、地藏肩に柳の腰元、手足の爪頭すつと薄く反上りて鬢の毛脚の長きは、浮世破りの曲者が隨喜渴仰の有難涙を注ぐべき祕傳の極意、ものいふ毎に何氣なく小首を傾けて笑へば深き露の笑渦に其身は知らぬど男殺しの本性を備へつと、年は十六名さへ蝶とは躑躅何處の花にや狂ふ戀の春風、あの三間まぐちの身代を丸めて宙に吹飛せばとてあの娘が小指一本の價値はあるまい、親の量見次第で生きた金庫になるべき尤物、十七十八は兎も角、十九や二十歳の曉、どんな男を持つかと北新堀の一名物に唄はれぬ、されど宇野屋庄兵衛、親の生肝を賣るとも一人娘を金にはせぬ男、車力の腹より拾ひあけた

る戌松を育て、我鑑定に叶はど、此奴こそ三國一の花婿と人しれぬ微笑を含みながら戦國の武士は太平の武士よりも剛い道理、もとの木阿彌から身代を起す商人も物の張合なうては油斷の基、それには幸ひの柏木め、主従もろとも重ねぐの怨恨を含んで心の弓張に射出す金的、おのれ貫かすば男と生れし甲斐なし、白い飯のみ食で黄色い糞するのみが人であるまじとぞ思ひぬ、

いつしか額に汗の夏も過ぎて、はや朝夕の軒場に通ふ風の色、目には見えねど音にも聞えぬ肌心地そよと吹くに附けても思ひ出すは亡父の事、その魂祭る盂蘭盆に餘所の精霊柵も悲しく、世間の夕暮に焼く迎火ちらくくと猶更ら恨めしく、をりしも主人の庄兵衛は外に出でて店の片隅に只一人の戌松が目につつ涙の背後より娘のお蝶そつと立寄つて言葉やさしう、

「ねエ戌松や、明日は、お盆の十六日だから汝も龜島町の家へ歸つて、おッ母さんと御墓詣りでもするが宜いよ、お父様が今にお歸りなすつたら、すぐ今夜から泊りがけでね、ゆつくと明日中へい、有難う御座いますが何、お嬢さん、私が歸らなくつても、おッ母ア一人で詣つてくれますよ」だつて汝、年に一度のお盆だよ、先刻お父様がお出かけの時戌松を今夜と明日中は歸してやると仰しやつたもの、ついでに汝が歸つたら、おッ母さんに妾からだと言つてね、お土産をあけておくれ、今朝から用意して置たのだからね、ホ、ホ、ホ、つまらなでもないだよ「へい、有難う存じますが、旦那様も細君も皆、御存じで御座いますか」知らなくつても宜いわね、妾があけるのだから「それでも貴嬢、旦那や細君が御存じのないものを私が、家へ「宜いといふにさ、をかした子だよ、嫌ならお止」どう致しまして、嫌といふんぢやア御座いませんが」それでは黙つて持ってお歸りよ、二歳も幼年の癖に妾のいふ事を聞か

男 山

登

ないと、いちめるよ、復仇に菊と相談して『やア、お菊どんには叶ひません、貴嬢あの大き
い石臼のやうな尻で、昨日の朝も私を材木の間に押付けて、酷い目に逢ひました』ホ、、、
ホそれ御覽、しかし菊も酷い事をするよ、いくら何でも、お尻で男の子を、なぜ汝食付てや
らなかつたの『なかく、張切つて居て齒が立ちませんもの、おまけに丸煮にした練馬大根の
やうな太い手を後ろへ廻して、この小僧め、なぜ人の出もの張れものを笑つたと、口の邊を
貴嬢、ぎう／＼捻りあげられました』あれまア、いけない菊だよ、もし今度そんな事があつ
たら、すぐ聲を出して妾をお呼び、ホ、、、、嘸、痛かつたらうね『痛いより貴嬢、臭くつ
て臭くつて出もの張れものゝあつた其まゝの尻ですもの、息が詰つて胸が悪くなりまして、
ハ、、、、『きいても嫌だよ、ホ、、、、』

龜島町の裏長屋、もとのまゝの住居ながら、良人に別れし女一人の手内職、手はあれど末を
思へば身のための奉公に出しやりつよ、いとど荒れたる茅屋に淋しき心の朝夕いつしか、夏
も過ぎて亡魂まで迷ひ來る盂蘭盆の夕まぐれ、精靈柵に迎火の哀れ猶更ら身に徹へて、浮
世の憂節しみ／＼と辛さ悲しさ恨めしさ、

おもへば今更ら返らぬ亡夫ながら縁あつて連添うてから丸十八年、朝は鴉の聲に飛起きて米
の空俵を解きつよ、餘所の浮世の錢さしを糾れども我身は貧に追はれて鉢一文の餘りし事な
く、夜は月夜を燈火に代へて草履草鞋をつくり、闇には人しれず大道の馬の糞沓迄拾ひ集めて
壁土の力草に拵へあけ、年が年中ほつと息つくまもなく稼けども、其日々々の苦しきまぎれに
柏木の車力となりて、やう／＼三年になるやならずの曉かに四十二の厄崇りとはいへ、罪
も報いもないに理を非に枉けられて袋叩きの病煩悶、其のまゝの怨死とは偕も／＼、これほ

ど不運の人が世にあるべきか、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、
 子どものいふ事ながらあの、茅場町に隙間もない柏木の家庫を踏潰して其中央へ石碑を建て
 るとは、父が冥土の土産、母が行末の念願、今の裸位牌浮世の悲しさ許し玉へと、佛壇もなけ
 れば米櫃の空箱破れし壁の前に押据て、手内職の苧を包む風呂敷をかけ、行燈の皿を其まよ
 の燈明に代へ蓮の葉に乗せたる瓜茄子、用なき炬燵の古火鉢に線香の煙り一入の悲哀を催し、
 涙ながらの唱名回向に餘念なき折しも、門口の戸を引開けて入来りしは戊松、はや目を濕ま
 せて無言のまよに立ちしが、やがて位牌の前に膝行寄りて母の背後より両手を合せつと、幽
 かに父が戒名を稱ふれば、母親わつと泣出しぬ、
 道は近けれど御主人大切その身が大事、用もないに戻るなといへば氣にかよれど丁稚奉公、
 うかく歸りませぬと言切つて、やうく月に一度、宇野屋庄兵衛が慈悲の米代を届けに来

る外は互ひに顔もみぬ母子、まして今夜は盆の十五日、亡人の魂魄が還るといふ精霊棚の
 前に手を取合うて暫し泣入りぬ、

庄兵衛夫婦が呉れし盆の贈物に金子二兩、娘のお蝶が母親へとて黄楊の髪櫛、髮油、前掛、
 襦袢の半襟、足袋まで年に合しての芳志を、戊松そのまよ取出して示せば、母は涙ながらに
 押戴いて聲を曇らせつと、よい御主人を持って第一が汝の幸福、この母へも月々お米代を下さ
 る御慈悲、あだ愚に思つては罰が當るよ、まアお嬢様のお優しいこと、このまよ御位牌へ備
 へて、ねエ戊松、旦那も細君も、なかく宜い方で、いろく氣を附けて下さるから、まる
 で奉公とは思へないほどだよ、お嬢様だつて、私を弟か何ぞのやうにねしかし、あまり
 御親切に甘へて、主従の見境を忘れては不可よ、先方様が可愛がって下さるほど、猶更ら油斷
 なく務めて、ね、うかくしては濟まないよ、して汝、今夜は久しぶりて今夜は泊つて、

明日も一日、暇を遣るから御墓詣りでもしろと仰しやッてね、また別に私へ、お小遣まで下すツたのさ、だから今夜は『何から何まで、有難いことだがね、そんな御主人の手前、さう一日も無駄に遊ンでは勿體ないよ、あすの朝、早く起きて一處に御墓詣りするから、すぐ其足で、お店へ、ね、その方が却ッて亡父も草葉の蔭から『何、私も、さう思ッて居ますのさ、友達はないし、親類はないし、最初より普通の丁稚小僧で居ない覺悟だから、亡父の墓へお詣りさへすりあアそれ、それで宜いんだもの』およよくお言ひだ、その覺悟で居れば大丈夫何でも一生懸命に働いて、早く大きくなッて、出世して、ね、戌松、復仇を取ておくれよ、汝があるばかりで、未を快樂に生きて居る母だから『おッ母ア、其、その事は、心配しなさんな、おのれ、畜生、きッと』その量見を忘れないやう、たのむよ』何、忘れるもンか、もし武士なら、今が今でも斬込でやる決心だ、過日も、ちよいと旦那に聞くと、あの柏木の畜

生め、うちの嬢さんを妾に呉れと吐したさうだ』えッ、眞實か』眞實とも、どんなに御両親が口惜がッて、お怒りなすツたか』だらうとも、まア呆れ返ツた酷い奴だね、づう／＼しい』そツと知らない顔で、彼奴の出るところを待受けて、咽喉笛に喰ひ附てやらうかと思ツたよ、まだ外にいろんな事をして旦那を困らせるんだから』しかし戌松、今、汝が無益な事をするに却て御主人へ御迷惑をかけるから、黙ッて、大きくなるまで』またさう思ッて、堪忍してるのさ、何でも早く一人前になッて、あの茅場町へ草を生してやるんだ』

やう／＼其日を送りかねたる車力の身に、これといふ因縁の寺も親交の和尚もなければ、龜島町の名主が憐れみて深川の海邊大工町なる臨川寺に葬り、卵塔場の片隅にて藪蔭の濕地に形ばかりの土饅頭、こよを戀しき良夫の墓標、亡父が無念の面影ごと、母子もろとも東天の

鴉に先だちて伏拜みつゝ、回向の水を注ぎ稱名の華を立て、涙ながらに掃き清めし後寺の本堂へ僅かの施物を供へて、三河の河岸傳ひ今川町の橋際より永代の方へ歸る道途も、なほ母の氣として子を思ふ絶間なくうるめる目に聲を曇らせ成松を振り返りて身のためを語り聞しぬ、

「あの永代を渡ッて分れるからね、すぐ汝お店へ歸るんだよ、けふ一日お暇をいたゞいて有難う御座いますが、只今母と一處に墓參を致しましたから、もう何處へも行くところが御座いませんと、ね、そして御夫婦へ前夜の御禮をわけて、お嬢様へ宜しく言ッておくれよ、お禮かたぐい母が附添ッて伺ひます筈ですが、わざと勝手を致しますと、忘れないやうに御挨拶するんだよ、また追々これから冷風の立つ時候だから、氣をお附けよ、曉方の夜具を踏脱だり咽喉が乾くと言ッて水を飲んだり、其外不養生をしては不可よ何をするにも身體が基本だから、よく分りました、安心して、ね、ぢやア永代を渡ッて分れますよ、今、言ッた事お

忘れてないよ、あい、母子もろとも永代を渡ッて、母は橋際を左へ子は橋筋を其のまよ、別れむとして猶また何とやら用ありけに停む折しも、空車三四邊を曳て來りし車力四五人、おもはず見返りながら「おい、見ろ、ありや、例の喜助が嬢アだぞ、この朝ッばら何處へ往つたか、牝馬の放し飼、後家になつてから却て何だか女らしくなつたやうだぜ、べらばう奴亭主がねエから響るんだらう、ハ、ハ、ハ、しかし、まんざらでもねエの聞きやア元の家に居るといふが、誰か家賃でも拂ッてる奴があるんだらうよ、」かも知れねエどころか、キツと請合の西瓜、中を割ッて見りやア美味い汁よ、ハ、ハ、ハ、うぬは袋叩きに逢ッて此世に残した嬢アが色叩きに逢やア世話がねエ、却て未練も残らず浮べるだらう、どうだ、この連中も昔馴染だ、念佛講の叩き分けにでも出掛けべいか、ハ、ハ、ハ、む、何だ、傍に居るなア餓鬼だらうぜ、どツか素丁稚にでも往つたやうな風だが、さアいよく後家の一人内職に極つた

ぞ、ハ、ハ、ハ、ハ、』
 下司の習慣、調子外れの大聲に高笑ひすれば、思はず脚下の石を拾うて悲憤の一徹、抛附けむとする戊松を引戻して、其まゝ半町あまり小走りに走去りながら、はらくと頬に傳ふ口惜涙を拭ひもあへず『これ戊松、今、彼奴等の言つた事をきいたかね、時も時お盆の十五日、お墓参りの歸途に母子二人だもの、昔馴染があれば猶更ら、弔慰の一事もいふべき筈を、あの、あんな口惜しい事を大聲で、しかし戊松こゝが浮世、ちつと辛抱する時だよ』ちと畜生め『泣かなくツても、汝が泣かなくツても宜いから、さア早くお歸り、歸つて何もいふもんじゃないよ』彼奴等ア、柏木の車力に違ひない、おと覺えて居やアがれ『彼方より汝さへ忘れなきやア宜いんだからね、これに附けても猶の事、しツかり仕ておくれよたのむよ戊松』
 『しと死んでも忘れないツ』

類は友を呼ぶ諺、まして柏木傳右衛門といふ一人を取巻て、根も葉もあるべき我身の仇にはあらねど、浮世は只これ次第と金が可愛さの働きぶりに、相手は宇野屋庄兵衛といふ一人の敵、しかも一方が此事がために土俵を禁じられたる驚が峰、一方は此事がために柏木の出入を禁じられたる半田幸庵、相撲取と太鼓醫者さても呵しき取組ながら、檜落しの大鬘と赤光の坊主頭、いつしか額を集めて人しれず私語き合ひぬ、

『關取、いかにしても彼奴あのまゝにして置ては、ちと水臭いこつたが眞實のところ、本尊の旦那よりも我々が估券に差響いて此の後の立場を失ふ道理、同じ一の矢を射損じながら、まだ關取は土俵を退た許りで大將の御意を損ぜないから大丈夫、たしかに脈はあるが、この幸庵を察して貰ひたい、實は箱崎町の住家も愚老の物でないのみか、去年の春、借入れた金の

されど現在その先生にも劣らぬ半田幸庵、醫は威なりとて箱崎町に糞威張の立關構いかめしく、醫は衣なりとて身には白痴威喝の縮緬小袖を放せしことなく、また醫は意なりとて日夜に心を配って油斷なく浮世の金ある奴を取込む工夫、幅狭き貧乏人の路次裏へは一切禁物のため長棒の駕に乗りて病家を見廻る勢ひ、宛がら大名の馬鹿隠居に似たり、一日の晝ごろ、先生在宅と見込で立關へ駈込來りし素丁稚の口上、息も切れなく響き渡る大聲張上げながら、「つい隣町の北新堀、宇野屋庄兵衛で御座います、娘の急病、是非とも先生にお願ひ申します」叫ぶや否、忽ち踵を返して其まゝ一散に馳歸りぬ、立關の取次かくと通ずれば、半田幸庵おもはず眉を擧めて、赤光りの額際を傾け唇端を巾著の皺に等しく引締めながら、この界限に醫者といふもの絶えないにもせよ、あの宇野屋庄兵衛、よしや死病に迫るとも意地骨を張って外を頼むべき筈の奴が、はて不思議、わけて娘の

急病とは猶更の事、その娘のゑに事起りて斯くまで睨み合ふ彼と我、その彼奴めが大事の娘に我匙加減の藥石を乞ふとは、いよく以て不思議の至極、されど背に腹は替らぬと世の諺、手も足も出ぬ急場の難儀に迫りしのみか、加之も互ひに平生の怨恨あるだけ却て彼是れ世間の沙汰を憚かるべき我と見込み、まして人命に關する醫業と見込んで殊更に我を招きしものか、されば我身に取て親しき病家よりも家業の盛衰ことにより、第一あの娘なうては謀策の玉を失ひ柏木への働きもならぬ次第、おのれ相手が内兜を見透して我を當座の用に使ふ以上は、我また彼奴が内職を窺うて後日の便利にしてくれむ、これを出汐に幸ひ一旦和睦せば萬事に就て今後の工夫も易しと、天晴心に一物の半田幸庵、時も移さず駕にも乗らず、わざ／＼喰ひかけし晝飯の箸まで捨てよ其まゝ立出でぬ、

「半田幸庵お見舞、御病人いづれに居られる、御案内たのみます」わざと供をも召連れず、

男 山

近ければとて薬籠も持たせずたゞ一人、みづから宇野屋の店頭みせに聲かくれば、戌松いぬまつそれへ飛で出て平蜘蛛ひらぐもの如く、どうか奥へといふ聲に主人の庄兵衛しやうべゑも立出でつゝ「やアこれは先生、その後ごのちは、一應お伺ひ申す筈はずいや申さいでは、濟すまない理由わけで御座ごぞいますが、つい御近所ごきんじよと油斷ゆだんが却かえつて御無沙汰ごむさたの原因ゆゑで何とも、はや、ところが只今ただいま、娘の急病きふびやう、さア事だと家内中かうちゆうが上うへを下したへと騒さわぎますばかりで、いやもう「なに／＼平無ひらなの御無沙汰ごむさたや何かは別段べつだんのこと、醫者いしやは家業かぎふで御座ごぞるから早速さつそく駆附かけつけましたわけで、過般くわぱんのこと以來いらい御當家ごたうけとは妙な間柄まがらになりました半田幸庵はんたかうあん、なほさら以て外々ほか／＼よりは念入ねんいりの匙加減さじかへんを御覽ごらん下されたい、兎も角も御病人ごびやうじんいづこに居ゐられるな「恐れ入おそれ入いります、さう承うけたまはると穴あなへも這入はりたいほどの義ぎで、しかし先生せんせい、どうか此方こちらへ」

奥おくの一室ひとむろの襖ふすまを引開ひきあけて、庄兵衛しやうべゑその閨際しむらひに片手かたてを支たへながら「これに居ゐります」

さやうかな、どれ／＼と半田幸庵はんたかうあん、何心なにこころなく差覗さしのぞけば、音ねに聞きえたる北新堀きたしんぼりの一名物めいぶつ、あはれ蒼つばみの花はなの雨あめにや惱なやみし風情ふうせいと思おもひの外ほか、憤こらししたるが如ごとき大おほの男おとこ、夜具よぎの袖そでより破鐘やぶかねに似にたる聲こゑを響ひびかせながら「やア先生せんせい、急病きふびやうだ、診察しんさつて下くださせ玉垣額たまがきのかぶ之助すけが俄にわかに煩わづらうた」

半田幸庵はんたかうあん、あつと驚おどろいて其まゝ其處そこに尻餅しりもちを搗つきぬ、

北新堀きたしんぼりの一名物めいぶつといはると娘むすめの病氣びやうき、さぞや蒼つばみの花はなの雨あめに惱なやみし風情ふうせいと思おもひの外ほか、寢ねがの如ごとき大おほの男おとこが首くびをあけて呻うなり出だせしのみか、あつと呆あれし頭上づじやうより玉垣額たまがきのかぶ之助すけと聞きて、半田幸庵はんたかうあんおもはず閨際しむらひに平駄張へたはりながら「これは、けと怪けしからん、かりそめにも仁術じんじゆつの家業かぎふいたすものを足下こなた方がた、お欺たましなされるのか」

かくと聞きくや否いな、背後うしろより主人あらしの庄兵衛しやうべゑ、通のしもやらぬ目色めいろを据すて差寄さしよりつゝ「いや先生せんせい、

お欺し申した理由では御座いません、娘の病氣は眞實ですが、七加減で人の妾を世話するやうな先生は薄氣味が悪いと申して、どうしても聞入れませんので、しかし折角の御來診を無にするも恐れ入った次第と存じて居りますところへ、この玉垣の親方が來られて、ちやア乃公の病氣を見て貰ひたいといふ理由でね」

前よりは玉垣額之助、小山の動き出すが如く、のそりと這寄つて幸庵の面體じろく見廻しながら冷かなる微笑を含みつゝ「今こゝの主人がいふ通りの理由でな、ハ、ハ、ハ、お忙かし中お氣の毒だが先生、ちつくら見て下さい、元來此玉垣の持病は惡寒もなく發熱もないが、どういふもんか知る知らぬは措置、人の曲つた事を見たり聞いたりすると腹の底から癩癩の太蟲めが、ぐうぐうと胸邊へ押上げて來て、そいつが兩の肩から左右の腕節へ廻つた時分は先生、どいつ此奴の容赦はねエ、片ツ端から張飛して打伸めしたくなるのが持病ですよ、

ハ、ハ、ハ、とりわけ金の猛威にまかして人を人とも思はねエ世間見すの糞白痴だの、又追従輕薄の空笑ひして大家の鼻息を窺ふ野太鼓だの、役にも立たねエ猿智恵を振廻して義理人情を踏潰す奴なんざア第一この玉垣が堪忍の出來ねエ病根でな、實ア昨日も、ある料理屋の奥二階で坊主頭と櫓落しの大鬘が額を鳩めて、とんでもねエ惡い相談して居たのを部屋の下行司めが襖越の小耳に挿んで、歸つて來ての委細を聞かや否、ぐつと俄に例の持病が起つたのさ先生、さア、すつと寄つて左の脈から見て下せエ、右の拳は病氣の加減で、いつ何時、變に動くかも知れねエから、こいつア後廻しだ」

半田幸庵、今は齒の根も合はず、五體ふるくと震はして、赤光りの坊主頭まで色まつまに縮みあがりし體を、玉垣額之助、なほさら冷かに見下して一膝ゆすりいでつゝ「おい先生、なぜ脈を見て下さらねエ、世間普通の外の病氣は兎も角、この玉垣が持病は先生に限るんで

すよ、ハツハ、、『いやはや恐縮の至極、今更ら何とも以て、これはなるほど、いや恐れ入った次第で』さう先生、大事の坊士頭を機織蟲のやうに、べこべこ下けすともだ、もし何とか心に思ひ當る事でもありやア今後一切、つまらねエ浮世の謀反氣を止めて本業の醫者一方に精を出すこつた、匙の先で病家の一人や半分を殺したッて醫は仁術といふ有難い傳來の金看板で、まさか復仇に来る奴もなからうがうかく、匙の外で可笑しな眞似をすると先生、其所ツ首の骨が曲るよ、また機會があつたらあの鷲の野郎にも傳言して下せエ、この玉垣と此家の主人たア最初に何の縁も筋もなかつたが、わい／＼外から人に騒がれて思はぬ内證に戀が成立つと一般で、乙な調子の妙な工合から互ひに氣が合つて来て、今ぢやア兄弟も同然だ、とこゝろで天下の力士を一手に取扱ふ玉垣額之助が、親方師匠に反いて飛出した幕下野郎に指でもさよして堪るもんか、年末年始は愚か爺と正月が一時に押掛けて来て家内に五人や七人

の葬式があつても、うろ／＼狼狽て下手な足首を揃はれるやうな男でねエから、来るなら来るで時と場合に構はず出て来い、土俵を退て玉垣が息の下を去つた今更ら遠慮は入らねエ會釋にも及ばねエと、先生、たしかに野郎へ傳へて貰ひたい、また柏木の旦那へも宜しく傳言、たのみませ、ハ、ハ、ハ、しかし折角お來診を願つた先生、たゞお歸し申しても濟まねエから、庄兵衛さん何か珍らしい腹の皮に焼附くやうな風味の變つた御馳走を出してエもんだな』
 『だが親方、この先生は江戸で居ながら佐渡の土より外に好物のない方だから、あまり遠方で、ハ、ハ、ハ、ヤ、恐縮、いよく恐れ入る、どうか此まゝ御免を、いや何いづれ改めて宇野屋さん、また其うち』

百兩と思ひし十本の指を百萬兩と吹倒されて、宇野屋庄兵衛に手盛の一ぱいを喰ひ、二はい

目には娘の病氣と聞て駈附るや否、仁王の如き玉垣額之助に吐鳴附けられて、半田幸庵おもはず震ひあがりつゝ、この上は三ばい目には何を喰はさるゝやら、いづれ生命と壁一重の御馳走、やれ怖ろしと坊主頭を抱へて鷲が峰に語れば、いつしか柏木にも聞えて傳右衛門が今更の驚愕、驚愕の果は口惜まぎれに例の狂氣めいたる癪癖むらくと募りて、日夜の酒色に青ざめし顔色も俄かに赤く朱を注ぎながら、暫し無言の額越に天井を睨んで齒を噛む音きりきりと響かせしが、やがて呻るが如き聲を出しぬ『もはや謀策も力も入らぬぞ、えッ幸庵も鷲が峰も思ひの外の手なし奴め、さア此上は金が金で働く商賣戦争だ、誰彼もない店の太助を呼べ太助を』

柏木の店には近年の出頭、彼奴が居るといはると太助、二十一年の中年奉公ながら今年三十六の曉まで、一昔半に江戸中の材木屋を切て廻りつゝ、いづこの入札場にも主人の印形を腰にさけて出るほどの男、いよく來年を禮奉公の最終として深川の六間堀に家も女房も一時に持つべき用意まで整ふたる出世前、しづかに入來りて閨際に伺へば傳右衛門おもはず膝を乗出しぬ『太助、ずつと此處へ、あらためて汝に相談があるから』へい、改めて私へ、いかやうの儀で『外でもないが太助、あの北新堀の宇野屋庄兵衛、彼奴を知ッてるだらう』宇野庄で御座いますか、存じて居りますとも、しかも貴方七年以前に自己の丸焼を幸ひ貸越の檜を踏潰さうとした奴でその時の談判役が私で、なか／＼意地骨の横に張った男、彼奴が何とか致しましたので御座いますか』いや、萬事は後刻で委細ゆる／＼話すが、まづ差當つての事、この江戸で茅場町の柏木傳右衛門ともいはるゝものが、つい鼻頭の北新堀で其日やうやう三間まぐちの瘦身代、しかも同商賣の爪の端に對つて、かれこれ手を出すでもないがね、あの庄兵衛め、何としても男の意地あのみ無事に置けぬ仔細あつて、幸ひ出入の幸庵と

鷺が峰に言附け、随分いろくの謀策も狂言も遣ッて見たが、なかくの奴で、案外の曲者、つまり今では此方の敗北、いはど毛を吹て疵を求めたやうな結果で、この上は猶更ら退くに退かれぬところを太助、汝に相談だ、彼奴を一旦に押潰す程の工夫あるまいかねなるほど平生の御氣性で、相手が宇野庄、お爪の端の垢にも及ばない奴で御座いますから、猶更以ての御腹立とは存じますが、およし遊ばせ、つまり負けても恥でなく勝たところで手柄にもならない奴ですもの、せめて、これが御當家の四半分か三分一にも届く身代の奴なら、また時と場合の意氣地から、一番、とツちめてやらうといふ氣にもなりますが、ハ、ハ、ハ、ハ、あまり雲泥の差で、お座興にもならない喧嘩相手、いや太助、其、その邊の事は萬々承知だが、いかにしても彼奴、あのまゝに捨置けない理由があるから、その理由も仔細も、つまり相手次第に據る事で御座いますから、兎も角こゝは太助の申上げる通り、第一また、あの庄兵衛と

いふ奴が醫者の幸庵や相撲取の鷺が峰に、ハ、ハ、ハ、ハ、恐れて狼狽る男で御座いますものか、この太助が七年以前の談判で彼奴の腕は能く存じて居ります、そこだそれだから汝に相談するのさ、しかし汝が不承知とあれば太助、頼まないぞ、まさか主人が家來に手を支へて御願ひ申すことも出来ないから、いへ何、決して、不承知と申上げた次第では、御主人に對して御言葉を反く太助では御座いませんが、それならば一工夫してくれ、汝も來年は、いよく家を持つて一人前の男になるンでないか、たとひ少々の筋に無理があつてもいはど奉公の仕終めだ、乃公が頼むといふ事に二の足を踏む筈がなからう、いや、宜しう御座います確と承知、お請を致しました、やッてくれるか、いかに太助、及ばすながら一番、幸庵や鷺が峯に入替ッて、がらりと旗色の違ッた陣立を御覽に入れませう、しかし只今も申上げました通り、なかくの奴、貧乏こそ致せ、苧殻を折るやうにはまるりかねますから、其邊は御心を長

く、ゆるくと御見物下さいますやう『よし、さア面白いぞ、太助、如才もなからうが油断せず、しツかり遣ッてくれ』無論で御座います、いよく覺悟して同じ遣るくらゐなら、宇野屋庄兵衛め、どれほどの男でも、二度と再び生面をあけて白晝に歩けない結局まで、ハ、ハ、しかし太助、彼奴の身に卯の毛の疵でも付けるやうな浅い狂言は、仕りませんから、いかやうな事が御座いまして萬事、御安心遊ばして『ハ、ハ、ハ、聞いただけでも心持が宜い』

積れば山となる江戸中の塵芥を年々に埋めて、深川の東より南の海邊へ築き出せしを俗に十萬坪さては六萬坪といふ、この六萬坪と洲崎辨天との間に鹽焼く煙の立上れるは、明和二年のころ、平井満右衛門といへるものが願書を上げて官許をうけつと、浪除十七町半の土堤を築いて鹽濱を設けしかば、これを平井新田とぞいひぬ、

ころしも九月の末の二十八日、晝ごろより俄かに空搔曇りて風吹荒みしが、夜に入りて次第に強く果は市中の梢を折り屋根板を飛せしのみか、沖の方しきりに鳴響いて打寄する浪の音もの凄く、その明方に見れば江戸一帯の海邊いづれも潮に食まれて、中にも深川の東南は暴風の筋にや當りけむ舟うち上げられて濱邊の小家も様潰されつと、かの平井新田の浪除土堤十七町半は影も形もなく取崩されぬ、

ことに宇野屋庄兵衛が召使ふ下女の菊といへるは平井新田の鹽濱にて釜下を働くものと娘、去年の春より今年十九の秋まで二年越の奉公に馴れて、主人夫婦の目に叶ひ娘お蝶の氣にも入りて、をりくその親の訪來る事もありしが、一日の夕暮臺所口より顔さしして手を支へながら『あの親父が只今まゐりまして、恐れ入りますが、どうか旦那様へちよいと御目に

男 山

かよりたいと願ッて居ります、何か伺ひたい事で」
 庄兵衛たゞ一人、はや今日の店も仕舞うて甘露一滴の晩酌も濟み果て、妻子は湯に行きて成
 松は永代際まで使ひに走出でし折柄、幸ひの徒然と其儘呼入れて何事ぞと問へば、ことし五
 十五といへど濱生育の岩盤爺、潮風に吹曝されて一人まッ黒に白き齒のみを現はしながら、
 『平生は御無沙汰いたしましたして、うぬが勝手の時ばかり、ハ、ハ、ハ、時に旦那、早速伺ひま
 すが、切口六七寸で二間半といふ赤松の丸太一本は、どれほど致しますもんで御座いませう
 か』さうさね、一本買と多数とで價も違ッて、また船舶の入津工合で時の相場といふ事もあ
 るが、まづ兩で二十五本か六七本といふ邊だな』へエ、とこゝろで旦那、そいつは三千本以上
 四千本ぐらゐる、今すぐ用立つもんで御座いませうか、實は過日の暴風に鹽濱の浪除を取られ
 まして、つまり石垣に組直す筈を、濱主の懐中合もあるこッて、まづ差當り松丸太をお込

横棧を入れて土を盛ッた上から粗朶とせで包まうといふので、勿論、崩れた元の石が七八分
 まで直下の洲に残ッて居りますから、まアそれで四五年は大丈夫といふ相談が出来ましたの
 で、ぢやア幸ひ娘の御主人に聞いてみてくれと頼まれまして、ちよいと伺ひました理由なる
 ほど、そいつア随分、面白い、時と場合で少々の損をしても家業に取て面白いこッたが、さ
 て三千四千といふ多數を寸法通りちよいと面倒だな、しかし當ッて見やうかね』どうか、お
 願ひ申します、實は、あまり露骨で、恐れ入りますが、幸ひ娘が御恩になッて居ります御主
 人の事、こいつを外材木屋へ遣りたくは御座いませんで、ハ、ハ、ハ、や、よく言ッて
 來てくれた、商賣冥利、決して無理な算盤は立てない、人間たゞ一人の全盛で自慢は普請の
 木口を請取ッたと違ッて、いはど多くの人が無くて叶はね日用の鹽濱、しかも天災の修繕だ
 から、なるべく及ぶだけ働いて積らう、しかし急に今その數があるか無いか、當ッて見た上

男 山

の事で『いへ私の方も、いよくとなりますれば、どうか改めて濱主と直接に御相談を願ひます、私は只、ちよいと下地を伺ひに出ましたまでのことで、いづれ明晩ころ、また『ぢやア明日の晩、御苦勞だが来て貰ひたい、きつと明日中に走り廻つて萬事ことといふ確實なところを調べて置くからね』何分、よろしく願ひます、うまく出来ませうやア自然この私も、濱主に對して肩幅の廣くなる理由で御座いますから『おツと承知だ、如才なく見積つて出すよ、外から點の打たれるやうな算盤を立てないからね、ハ、ハ、ハ、』

神社佛閣、武家屋敷、町家の大普請などには、膽魂の割に身代の太い奴めが伸張出て、木口よりも時の相場よりも袖の下から小判を飛ばして争へば、内證手薄に羽翼が狭うて正直一方の腕で立つものは、却て跳退けられ、いつも無念の拳を握りし折から、三千四千の松丸太は我

皮肉を肥すに足らねど、平井新田と人も知つたる鹽濱全體からの注文は面白し、いはど身に取て家業の面目、商人は損して徳とる世諺ことなり、おのれ江戸三十七軒の間屋が抛賣にする値よりも三間間口の宇野屋庄兵衛が安く見積つてくれむと、曉の明星をいたゞいて家を飛出し、四方八方に驅廻りし其日の夕暮いつ何時にても四千本その場に整ふべき手筈を取極めて立歸りつゝ、折しも來合せし下女の菊が親父に確固なる返事を持たしやりぬ、庄兵衛、その夜のうちに見積書を認め置いて、あくる日は見本の赤松丸太五本を取寄せつゝ、かくと言遣れば濱主みづから出來りて猶も仔細に打合せながら、さらば頼むぞ、頼まれまして、いよくこゝに約束證文を取交しぬ、

北新堀の何處にかと探しまはれど、目にも入らざる端た材木を立掛けて、その薄間い物蔭よ

り十五に足らぬ素丁稚一人を相手に、材木屋といふ材木屋が鼻息で笑ふ拾ひ普請の餘滴を吸ひつゝ、年が年中の貧乏神に組伏せらるゝ宇野屋庄兵衛が何とした拍子の瓢箪より駒に乗つて飛出したか、四千本の赤松丸太を一時に買占めむとて、涼風の立つ秋の夜明から額の汗を拭て四方八方へ駈廻るとの風聲、ぱつと同業へ響き渡りぬ、

まして茅場町の柏木は材木屋の天下取、かくと聞くや否、をりしも帳場の結界を城郭として店頭へ寄せ来る敵に對ひつゝ兼て用意の掛引に算盤珠を打出す手代の太助、おもはず眉を擧めながら小首を傾けぬ、

たとひ自己が身代不相應の幕を張るとも、かき集めし色数の端材木、せめて百本か二百本が關の山、その宇野庄が赤松の丸太一色しかも寸尺まで揃うて四千本を一時に入用とは、さても不思議の至極、よしや不意の建場に不意の銀方が湧て出ればとて、この廣い江戸中に外の材木屋を捨てよ彼奴一人に任せてやらす白痴はあるまじ、さては近在の田舎大盡を手鞠に取つたか、さなくば地獄の釜の上を一足飛び、苦しまぎれの糞度胸を据て物凄に放れ業をするに極つたり、やれ面白いぞ、真正面からの力攻では容易に死切らぬ奴ながら、同じ商賣の道を傳うて攻立つれば一息の一擽に落城すべき奴、此機を外さず踏潰してくれむと、人しれず微笑を漏して小膝を打ちぬ、

當時の大名高家も及ぶまじき柏木傳右衛門の振舞魚類も野菜も七日の間は同じもの一切を禁じて、夜食には一入の豪華を極めつゝ、銀燭の下に山海の珍味を拵並べ、酔へば其まゝ美人の膝を光に暫しの轉寢、うとくとして臥房に入らぬ間ぞ一刻千金、いつとても春は我家の常ぞと唱ふ折しも、例の太助、そつと入來りぬ、

男

山

「太助か、用ならば明日にしてくれ、あゝ酔ったぞ、酔ったく〜いや、お店の御用では御座いません、實は、かねて御立腹の宇野屋庄兵衛、彼奴いよく〜死ました儀に就て少々〜」

「えッ、死だ、あの庄兵衛が〜ハ、ハ、ハ、ハ、まだ身體だけは満足に生きて居りますが、もはや彼奴の運命は、この太助が最後を刺しましたので〜むよ其、その理由は『例の一件、お請を致しました以來、おのれと規つて居りましたところ、今度、彼奴が赤松の二間丸太四千本を一時に買占の風聞、はて不思議と昨日來、そつと手を廻して探りますれば、平井新田の鹽濱から十餘町の浪除に打込む注文のよし、しかし江戸中の材木屋の彼奴の一人占が猶更ら不思議と心得、幸ひ鹽濱に知邊の二三人を酔潰して、いろく〜聞出せば、あの宇野庄の下女の親父が釜下の男で、それから濱主へ怒の絲筋を掛けたとのこと、ハ、ハ、ハ、ハ、外の藝では少々そのまよに乗せ憎い奴で御座いますが、もはや大丈夫、蛇の道は蛇の穴から掘返して、いよく〜」

彼奴が四千本の松丸太を曳出したといふ罅際で、男泣に泣かして御覽に入れませう〜や、面白〜男泣で濟めば重疊、その泣音に乗じて脇が轉がり返る胴蹴の一工夫、ハ、ハ、ハ、ハ、思召が御座いませうなら、ついでに彼奴の娘、そつと掌上に乗せて、お傍へ差上げますも易い事〜」

「たゞ太助、そこだ、もし入るなら金は惜まないぞ〜太平の鐵砲玉は金の世の中、いづれ少の儀は、しかし太助、宇野庄風情を的として御多分の金子は散しませぬ覺悟、まづ只今の御様子合から割出しまして、三日四日ある芝居見物を遊ばしたぐらゐの處で大丈夫ハ、ハ、ハ、安價か高價かは御覽濟の上で〜面白い面白い、さア酒だ、あらためて酒にする、太助一ばい飲めッ」

膽魂が細くとも身代の太い奴が萬事を仕て取る世の中、智恵才覺はあつても無くて叶はぬ金

の光輝に押されて、無念ながらも江戸三十七軒の材木問屋に鼻頭の挨拶せられし宇野屋庄兵衛、おのれやれと人しれず拳を握りし折しも、平井新田の松丸太を一手に引請けて聊か平常の鬱念を撫でつゝ約の四千本について一割半の利益あるべき筈をわざと思ひ切つて車力も船積も小揚まで一切そのまゝの無賃にした上、さらに一割半の損を承知に男づくの商賣辛けれど今この意地を立てずば立たぬ庄兵衛、得は却て他日にあるべしと齒を喰ひ絞つて働きぬ、四千本のうち二千三百本までは木場と冬木町との材木屋にありしかば、そのまゝ車に積で平井新田の濱邊に持込み、あとの千七百本は靈岸島さては六間堀の材木屋より集めしかば、小名木川の高橋下に舟をかけて大川に出で永代際を越中島の内堀に漕入れつゝ運び込みぬ、いかな大問屋でも一時に四千本の松丸太といへば陸より海より車と舟との相違ありて、一日のうちには逆も同時に積込まれぬ筈を、宇野屋庄兵衛、これも時に取て幸ひ一事の意地と猶

更ら心を用ひつゝ、道の遠近に従ひ舟車の遅速を考へ前後の時刻を圖りて、其日の夕暮までに残らず約束の場所へ積上げたる手際、三間間口の材木屋には惜しい男と誰いふものはなけれど、我ながら心地よしとて獨り笑を含みぬ、

されど生憎その日は濱主に遁れ難き所用ありて、朝より何處へか立出でしとの事、待てども待てども更に歸らねば、手形も請取判も萬事を明日の事にせむとて、庄兵衛そのまゝ我家に歸りつゝ、まづは近來の一仕事これで済みしと思へど、何となく心の勇みに晩酌の盃を過して、ほろり酔ひし手枕を此方に妻子を見返りながら「やれく草臥れたぞ、この四五日は全く草臥れた、しかし少しは氣骨の折れる事があるので面白いのさ、商人は損益に拘はらず自分の思つた通りに事を仕上げて、働いた上の一盃、實に甘露だ、ハ、ハ、ハ、今夜アよく寝ることつたらう、あすの朝は早く起してくれよまだ濱主の請取判を取らないから「嘿まあ、お勞れな

を弟のやうに思つて、ね、互ひに行末の頼りだ、宜いかハ、、わづか二歳の相違だらう、
汝は師走の生産、戌松は正月の生産、たつた一年だ、ハ、、、、

固より損を承知の腕一ぱいに働いて、平生の我を鼻頭で扱ひし問屋どもへ聊かの一文句、ど
うで御座ると口に言はねど心のうちに仕てやつたる宇野屋庄兵衛、おもはず其日の晩酌を過
して寢床に入りしが、四五以の草臥れ一時に出で二度まで妻に揺起されながら、やう
やう三度目に目を見開けばいつにない事、はや日は高く軒を互りて窓より射入りぬ、
やア寢過ぎたぞ、丸裸一貫より千貫萬貫の身代にならむとする男が、これほどの小事に勞
れて寢過ぎるとは不覺の至極、おのれ性根を確實に持ち居れと我手に我胸を打って飛起きつ
つ昨日のうちに濱主より取置くべき約束の半金は兎も角、四千本の請取手形、今日こそ朝の

うちに埒あけむとて、其まよ北新堀の我家を出でて永代橋を渡らむとする折しも、彼方より
下女の菊が親父、秋風の朝顔に玉の汗を拭ひながら顔色を變へて馳來りぬ、

「やア宇野屋の旦那、どよ何處へ」此方よりも其方が慌てよ何處へ行くんだとこつて、旦那
那の御家へ」むよさうか、幸ひ、これから平井新田へ出かけるところだが、濱主は歸つたか
ね」濱主の歸る歸らんは儲置て旦那、たよ大變な事が出来ました、あの四千本の松丸太が前
夜、一夜のうちに、どよ何うしたもんか一時に消て無くなりました」ハ、、、、馬鹿ア言へ、
吹けば散る紙屑でも濱邊一町半に積上げた大荷物、まして材木が、ハ、、、、夜明の夢でも
見て飛で來たんだな、おい確乎しい、老い年をしていやは旦那こそ前夜、をかした夢の靈告
でも御覽なさいませんか、なるほど嘘と思召すのが道理で、無いといふのが不思議の至極で
すが、しかし現在あの四千本の丸太が一本も残らず、今も今とて新田中の者が寄て集つて評

切口五六寸で長さ二間半の松丸太四千本、しかも浪打際を隔て崩れ残りの土堤蔭に敷詰めながら隙間もなく積込たる上は大地に根を持つも同然、江戸市中の夢を一時に破るほどの暴風雨ありとも容易には掻攪はれぬ筈、本所深川の床板を食込むほどの海嘯あつても、また打返さるゝ曉の餘波に百本二百本は漂うて残るべき筈、さるを浪なく風なく、わけて物靜かなる一夜のうちに消て無くなるとは倅こそ曲者、しかも尋常の曲者ではあるまじ、たとひ熊坂長範と石川五右衛門が組で押來るとも、金銀珠玉ならば格別、馴れぬ一夜の業に四千本の丸太を取去らむことは何として、されば此曲者いよく我同商賣の奴に極まつたり、かねて我を覗ふ身代の太い奴めが金にあかして人しれず大船を漕寄せ、其まゝ海上を遁去つたるに極つたり、まして四千本の値よりも四千本を一夜に取去る萬事の費用こそ幾層倍、それにも怯ま

すこれほどの大膽なる仕業をする奴、そもくこの江戸中の材木に誰彼といふまでもなし、あの柏木め、其後さらに何の音なしと思ひしが、おのれ、おのれ、其間に飽くまで白刃を磨で此庄兵衛の咽喉首へ、おのれ柏木め、

ことまでの大仕掛で深く謀りし上は、なるほど、約束の其日に濱主の遁けたも果して彼奴が指金、さては買主の手金も取らず受渡しの判取帳に手形の印行もないうち盗まれたは賣主の丸損にして、その機を外さず木場と六間堀の材木屋を唆かし日夜を分たぬ矢の催促に四方攻の計略、この宇野屋庄兵衛に男泣の立往生さした上、家も店も妻子も一時に踏潰さうとの謀策か、さるにても酒色の外に藝なき傳右衛門が采配としては聊か過ぎたる陣立、まして力業の鷲が峯と太鼓醫者の幸庵風情のならぬ事、はて何者の軍師ぞ、もし柏木の店にありとすれば、七年以前の我丸焼を氣の毒とも思はず押込來つて一文句を捻りし男、あの太助といふ奴

に相違なし、

しかも年々木曾の檜を切出して尾州より遠州灘を越えつゝ江戸に入來る船舶は、いづれも柏木が息の下に通うて一手の家來も同然、まして金錢づくには港津の戀を覗うて前後の差別もなき水主船頭の習慣、いよくこの曲者は多くの傳馬をかけて沖の大船に積込たるまゝ海上を遙かに遁去つたるものと思へども、行方も知れぬ雲と水、空ふく風の音便もなければみすみす彼奴が業とは知りながら、無念や八百八町の江戸中に影も形も一本の證據もなし、されど心に泣いて目には一滴の涙を持たぬ宇野屋庄兵衛、無念と口惜さしに嚙む齒音さへ人には聞かさず、知るまではと妻子にも打明さず、たゞ自己一人の腸を絞る苦しき辛さ、じつと堪へて兎も角も奉行所へ訴へ出でしかど、こゝにも柏木が振出せし藥や廻りけむ、金銀衣裳の比類とは格別それほどの材木を一夜に盗まれし大油斷者奴と頭上より叱られて、差出せし

訴狀は其まゝ收まりしが俄かに詮議の模様もなし、

しかも誰いふとなき世間の口、蟹は自己の甲羅に依て穴を掘るとの諺もあるに、身のほど知らぬ宇野庄めが不相應の幕を張つて四千本の松丸太を買占めし間もなく、一夜のうちに盗まれて買主の手金も得取らず請取手形の印形もない白痴さ加減、同商賣の訓戒に容赦は入らぬぞはたいて取れとの風聞はつと立ちぬ、

かねて覺悟の事ながら、庄兵衛かくと聞て今更に無念の拳を握りつゝ、人しれぬ男泣の涙を呑込で今年四十四の鬢と毛も一夜のうちに白髪となるの苦痛、おもはず茅場町の方角を睨みぬ、やア、さても深いところへ落しをッたぞ、このまゝ沈むか浮ぶか生涯の瀬戸際、おのれ柏木め、

男 山 後 編

黙ッて見ても一割半の利益あるべきところを、わざと承知で一割半の損をしながら、四千本の松丸太よりも今は男を賣込む後日の一活動、ことごとく思ひし甲斐もなく一夜のうちに盗まされて、しかも此大仕掛の曲者は必ず彼奴が業とは知れど、現在これといふ取ッて突出す證據なければ、奉行所へ訴へても頭上より大油断ものと吐り飛され、同商賣には身の程知らぬ白痴の骨頂と笑はれ、いと可愛の妻子には思ひもよらぬ不意の悲歎をかけ、濱主には約束の日を遁けられて手金も請取らぬにはや前後左右よりは寸隙もなき矢の催促に迫られて、流石の宇野屋庄兵衛、男泣の涙を呑込だるまゝ動きも取れぬ立往生となりし此苦痛を、どこの隅

にか手を拍て笑ふ奴があるかと思へば、その笑聲まで膈に響く心地して、猶更ら無念の涙はらはらと湧出でぬ、

四千本の松丸太は木場と冬木町と靈岸島と六間堀の材木屋より借集めて、相手は七軒なれど、その七軒の催促を自己一人が仔細面に請込だる六間堀の大和屋勘兵衛といふ男、根を洗へば此奴また柏木の息の下より通うて、我を此深水へ落とし込だる曲物の張本あの太助とは再従弟のよし、きけば聞くほど五臟六腑も沸返る無念さ心外さ、おのれとは思へども、さて貸した奴が取りに来る世の中、あゝ何とせむ、

三間間口の小店ながらも北新堀の表通り、せめて我持家ならば人しれず書入れて金を取出す工夫もあり、また親子三人が丸裸となつて今この商賣を一時に廢める氣ならば、賣残りの材木と衣裳手道具一切を掻集めて四千本の借金さのみの苦にもならねど、悲しや七年以前の丸

焼に逢うて家は借もの他人の物、いかに苦いとて宇野屋庄兵衛このまゝ材木屋を捨てて妻子の手を引きながら遁出すべきところもなしと、店頭で腕を組で思案に其日も暮れかよる夕まぐれ「やア宇野屋の御大將、矢玉の用意が出来ましたかね」ほつと思つて見上ぐれば、これぞ浮世の地獄に呵責の鬼面、六間堀の大和屋勘兵衛が冷かなる笑を含んで腰うちかけながら「また來ましたよ、ハ、ハ、ハ、ハ、」

貸借のない男づくなら鼻息で吹飛ばすべき奴ながら智恵も才覚も今かうなつては金に叶はぬ世の中と庄兵衛そのまゝ摺寄つて頭を下けつと、何をか言はむとするを言はしめぬ大和屋勘兵衛、七軒の催促を一人に背負うて七ツ道具の辨慶にも劣らぬ勢ひ、ぐつと膝を進めぬ「宇野屋さん、どうしたもんだね、かう度々、足を榎木に仕られちやア困るぜ、二十五本を兩として四千本の手前で僅か百六十兩の金、それも此方から頼んで賣込だ品なら格別、其方から矢

を射るやうに飛で來て、いはど否といふ奴を無理に掻集めた當座貸の代金だ、ね、今更ら男らしうもない、盗まれたの手筈が狂つたのと、あとの祭禮の愚痴を言はれた義理ぢやなからう、また聞く理由もないから、餘計な文句は脱にして現金こゝへ並べて貰ひたい、ハ、ハ、ハ、ハ今は兎も角、もとは江戸三十七軒の間屋にも聯つた宇野屋さん、いくら枯れても淋しくツても高が百六十兩の端た金、無いぢやア通るまい「なるほど、いちく御道理、今こゝで何と申譯もない事ですが大和屋さん、打明けたところ、實は「いや實も嘘も仔細も入らないことだ、いちく御道理なら猶更ら以て文句のない筈、打明けても打塞いで金さへ貰へば天下泰平だ、それとも宇野屋さん、我々七軒を相手に取て一戦争する氣かね、いやさ四千本の松丸太あのまゝ、みごと踏む覺悟かね」こりやア大和屋さん、お情ない、いくら宇野屋庄兵衛が苦しいからツて、まさか「まさか踏む氣でなくば金を請取らう、この大和屋も五十面さ

けて丁稚小僧ちやあるまいし、今日で三度目、自分の貸は兎も角、たのまれた外の六軒へ對して此まよの握拳で歸られるか歸られないか、篤と胸に手を置いて急かす慌てず狼狽すに間違のない思案を願ひたい、ハ、ハ、ハ、しかし金銀衣裳と違つて四千本の材木を一夜に盗まれる、といふ萬事お目出たい宇野屋さん、胸に手を置いて考へたところで間違のないにも限るまいから今日は猶更以ての事、金を請取るまでは此店頭を一寸も動かれない、さア請取らう、今ここへ、並べて貰はう、最初から踏む氣でもなく詐欺でもない以上、借りたものを拂はぬといふまい、一本も残らず盗まれたを僥倖に、覺えないとはいふまい、三間間口の借屋で店賃が滞つても住めば男一人前の主人、まして妻子のある身だ、今更ら遁隠れもすまい『いや大和屋さん、そこまで承はれば宇野屋庄兵衛も本望、この上に申譯する手も口もない、よし、あつたところで聞く耳のお持合せは御座るまいから、明日の正午までに、きつと埒をあげませ

う』待つ待たぬは今までの事、もう此上は是か非でも無効だ、一刻もといふべき筈のところを、ハ、ハ、ハ、この大和屋が男氣、ぐツと呑込で明日の晝まで待つ代り其時こそ宇野屋さんいよく、文句なしたよ、宜いかね、なほ念のため言つて置くが、仲裁人だの挨拶人だのと横から不意の飛入は眞平だぜ『御念に及ばず本人宇野屋庄兵衛きつと出ませう』

七軒の中でも第一に年輩の大和屋勘兵衛、四十の分別盛りも一昔に過ぎて今年五十面の禿頭、しかも平生より萬事に仔細らしい切口上の男、かゝる時こそ立騒ぐ外の六軒を押静めて何とか工夫も手加減もあるべきに、おのれ眞先かけて責來るのみか、さのみ荒立もせぬ六軒を咬かして催促の總掛りを一人で引受けつと、心の底に白刃を磨で舌の端に毒を含みながら、この庄兵衛を打て叩いて蹴て踏潰さむとは、よくよく柏木が小判の煮汁に喰ひ酔つたる鬼畜

生、されど差當ッて此奴が眼前の大敵、今更ら持餘して溜息を吐きぬ、
 松丸太四千本の代金百六十兩よりも一人の我を踏潰さむための謀策とはみすく手にとる如く見えながら、さて其金なくば自然に踏潰さるゝ我身の切迫なさけなや宇野屋庄兵衛の生死も僅か百六十兩の生命相場となつたるか、ことし四十四の曉に十六貫目の五體とすれば、今まで何の病煩ひもなく浮世の浪風を凌ぎ來りし一貫目の皮肉が、たつた一兩の價格と泣きぬ、もはや浮世の瀬戸際、これが人間不運の頂上より南無三寶の水底へ思ひ切ッて飛込たる苦痛、男泣の涙を呑込みながら妻子の手を取て人しれず燈火の下に引寄せつゝ、因果を含めて親子三人が四季の衣裳は固より、いとし可愛と育てし一人娘のお蝶が髪飾具まで、ありとあらゆる家中の一切を掻集めて葛籠に五はい、見るに見兼ねて泣きながら遣出す皮松にも仔細うちあけ、主従が背に負うて其夜の闇を犬に吠えられつゝ、七年の前丸焼の時さへ喰絞ッて立寄

らざりし質屋の門口、そつと入りて火影の届かぬ片隅に顔を反け、これで何程といへば、その金高わづかに五十三兩、
 庄兵衛そのまゝ無言に其金を請取らむとすれば、戌松そつと袖を曳て力まかせに門口へ押出しながら、おのれ一人、あとに残ッて質屋の番頭が前に飢ゑたる猿の如く、兩眼より溢るゝ涙片手に指さしつゝ『あゝあれが、私の旦那です、どうか其五十三兩を、この通り拜みます六十五兩にして下さい、其、その中には、たつた一人の嬢さんが帯も、正月の著物も、かよ簪も、拜みます、六十五兩、十二兩だけ拜みます』
 門口に立聞く宇野屋庄兵衛、おもはず軒の柱に取附て、目鼻も崩るゝばかりに顔を押當てながら、總身の太息ほつと吐きぬ、
 こゝぞ恩義の土が大事のところ、總一文でも無くて叶はぬところと、其身も一生懸命の血の

涙、番頭の前に伏拜ンだるまよ、よしや打たれても叩かれても殺されても動かぬ體に、浮世の悲哀を常として涙を見馴れたる質屋の目にさへ果は情を催しつと、又一ツには三兩四兩の上貸しても損のない品物と思ひけむ、五十三兩を六十兩にして突出せば、戌松其儘押戴いて門口へ飛出すや否、待受けし庄兵衛が手へ無言に渡しながら、石を拾うて闇より吠附く犬の聲を的、はッしと抛けぬ、

幸ひの闇を主従もろとも涙に歩みながら、四邊に人はなけれど聲を潜めて語りぬ『戌松、あ汝も運の悪い、つまらない主人を持って、かゝ可哀さうだ、しかし今夜の事、忘れてくれるな、これも原因は、あの茅場町『旦那、私の年が、ゆかないから、ざゝ残念に思ひます』おオよく言ツた、年は十四でも、その量見さへありやア頼母しい、確乎してくれ、よ、切迫に詰ツた本人の乃公でさへ、面目ないが先立ツて、五十三兩そのまゝ請取らうとしたところを

不意に門口に押出し、あとへ残ツて番頭の前に居坐ツて七兩の上借、戌松、時も時だ、わけて過分に思ツてるぞ、しかも自然に落附た其度胸、なか／＼乃公は及ばない、もし此まよ宇野屋庄兵衛が倒れても、頼むぞ、キツと遣てくれ、頼むぞ戌松『え旦那、こゝ斯な事ぐらゐで、時に旦那へ、お嬢さんへ今夜ア何か、途中で、お菓子でも買ツてあけて下さいませんか、細君も、夕飯を召上らないやうでしたから』むよよく氣が附た、なるほど、まだ夕飯も喰はないやうだツたな、いや喰へなかつたらうよ、ぢやア戌松『へい、旦那は一足お先へ、私が例の菓子屋で何か買ツて歸りますから、えッこの畜生め、また吠えやアがるぞ、しッく』

血の涙もろとも親子三人の身の皮を剥で、ありとあらゆる家中の一切を掻き集めし質草の五十三兩戌松が居直ツて拜み出したる七兩の上借、合して六十兩の金を懷中に捻込みながら、無

念の腸は湧返れども當の相手は大和屋勘兵衛、あとに百兩は残れど差當つての峠を踏み越えた上、又里に出る工夫もあるべしと氣を取直しつゝ、約束の晝前深川六間堀の大和屋へ行きぬ、

首尾よく金子調達せよと待つべき筈を、同じ事なら首尾よく仕損じて来いと待受けし大和屋勘兵衛、じろりと額越に入來る庄兵衛を見上げながら、わざと見え透たる輕薄の空笑ひ「ハ、ハ、ハ、約束の金は兎も角、約束の時刻だけは間違はずに來ましたね、まア此方へ、とこゝで昨日もいふ通り一切の文句なしだ、第一こんな嫌な事は互ひに埒の早いが宜い、ねエ宇野屋さん、時に百六十兩、耳を揃へて出して貰はう」なるほど、昨日、お約束した通り其百六十兩、是が非でも持つて來る筈でしたが、少々また手許の都合があつて實は「おい、宇野庄、そりやア何をいふンだもう今日は其手に乗らないよ、ふざけるない、どこまで人を

馬鹿に「しかし大和屋さん、空手では何ひません、兎も角こゝに六十兩、まづ今日はこれだけ請取て置いて下さい、残金は近日、必ず、どんな工夫面をしても持參しますから」いけな、いけな、いけな、端金は請取らない覺悟だ、それも催促の初日なら格別、またこの大和屋一軒なら百六十兩で六十兩の内金、残金は近日といふ事にもしやうが、たのまれた六軒の手前、鏝一文の缺損があつても請取れない「しかし、残金も近々、決して長くとは「いや、いけない、どうあつても不可、逆様に吊して鼻血の外に出ない奴なら兎も角、百や二百の金を出せば出る身で居ながら、何のこつた、男らしうもない」こりやア大和屋さん、思ひもよらない有難迷惑、その金があるくらゐなら宇野屋庄兵衛も四十四の男、この面さけて、こゝまで下から泣音を出さない筈「ハ、ハ、ハ、あんまり狼狽て度を失つたから、無理もないが、おい宇野庄、あるぢやアないか、しかも小判の塊物が轉つてあるぢやアないか」ハ、ハ、ハ、時と場合

で、いかな座興に乗せられても今は致方のない庄兵衛、戯談は俵置て『いや座興でない戯談でもない、眞實だ、取も直さず娘のお蝶、ありや生きた小判だぜ、背に腹は代へられぬ世の凡例、委細なしの百六十兩で此大和屋が買ひ取らうか』

折しも奥の方より立出でたるを誰かと思へば、太鼓醫者の半田幸庵、赤光りの坊主頭を片手に撫でつゝ、目鼻を一ツに寄せて立ッたるまゝに庄兵衛を見下しながら、『やア宇野屋さん妙な處で出逢ひましたな、御商賣ます〜御繁昌ですかね、とんと其後は御無沙汰、ハツハ、ハ、時に先達ちよいと御相談を仕かけた百萬兩の口、あいつ如何です、時と場合の成行で百六十兩ぐらゐるに、まかりませんかな、もう宇野屋さん、こゝろが見切時ですぜ、しかし委細は後日また改めて伺ひませう、さて大和屋さんお邪魔いたしました、なアに只、ほんの一時で、お風を召したばかり、平生から御丈夫な妻君ですもの決して御心配には及びません、身

代の内證へ秋風の染込だとは違ッてね、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、すぐ癒りますさ、や、宇野屋さん、大變御顔の色が悪い、どうかなさいましたか、藥禮は兎も角、仁術の家業、御遠慮なく藥を取りに来て下さい、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、

宇野屋庄兵衛おもはず血走る眼を見張ッて、立去る幸庵の後姿と前なる大和屋勘兵衛の面上を見分けながら、五體を震はして兩の拳を握りぬ、

四千本の松丸太を一夜のうちに盗み去つたる大仕掛の曲物、外にあるべき筈なれば、みすみす彼奴の業と知りながら、口惜や濱主に約束の口を遁けられて手金も得取らず、無念や證據ないため奉行所へ訴へても詮議の前に叱り飛ばされ、をめぐり泣寝入の怨み骨髄に徹する折も折柄、またその曲物の手より逆寄に攻められて、親子二人が身の皮を剥だる甲斐もなく、

大事の一人娘を百六十兩に値踏せられ、あの幸庵の赤坊主にまで散々の嘲弄をうけたる宇野屋庄兵衛、今は生命と壁一重の悲境に立至りぬ、

さらぬだに七年以來の内證手薄に苦勞をかけたる妻の手前、可愛や今年十六の花の蕾の一人娘を丸裸にしたる手前、さては戌松が主を思ふ一心の涙に濡るゝ手前、この六十兩を今日の役にも得立てず、すごくこの泣面さけて我家に歸らるべきやと、深川六間堀の大和屋を立出でたるまよ、歩むともなく停まるともなく永代橋を渡りながらふと思ひ附いたるは玉垣額之助、

平生は兎も角、かゝる時こそ相見互ひの浮世、金は貸さずとも情義あるべき善の同商賣が、いづれも却て真正面の敵となつたる今更ら、がらりと家業も違ひ渡世も違ひ筋も道も違ひし人、まして何の縁も由緒もなく、たゞあの鷲が峰の事より二三度の面會、しかも迷惑かけた

るばかりの玉垣額之助、その面前へ此庄兵衛が泣面を出すべき道理なけれど、天下の力士を取扱ふほどの男振、委細を打明けて頼まば一方の血路を開く事もあるべし、恥辱も外聞も厭ふ場合でなしと、其まゝ俄に足を早めて玉垣の家を訪ひぬ、

折しも額之助は此四五日以前より風の心地と打臥せしが、宇野屋庄兵衛と聞て其まゝ呼入れつゝ、竹馬の友にも等しく心安氣の笑を浮べて何用ぞと問へば、問はるゝほど猶更らに苦しく辛く、我にもあらず其場に打伏せしが、やうく頭をあけて男泣の涙もろとも、ありし前後の仔細を打明けて物語れば、額之助おもはず座を乗出して眉を繫めながら、雙腕を組で暫し考へしが、思案に閉ぢし兩眼くわつと見開くや否、流石に日本晴れの男家業、さらに何の文句もなく『その百兩、この玉垣が用達ませう』

死せるが如き庄兵衛は、ハツと俄に生返りし心地、其まゝ這出でて何をか言はむとすれど、あ

まりの嬉しさに胸迫って言葉も出でず、たゞ目に持つ涙の鼻先を、玉垣額之助、靜かに片手もて打消しながら、軽く首肯して膝を進めぬ「かりそめにも百兩といふ金、裸體商賣の手許にあらう筈はない、しかし宇野屋さん、御安心なせエ、土俵の上で兎や角いはれた時分から今に引つゞいて出入する旦那方を驅廻って、この玉垣が一世一代、男の面にかゝる事といやア、まさか百や百五十兩、むづかしい理由もなからうさ、暫時、せめて夕方まで待て居て下さい、きつと揃んで来るから、もし萬一、萬々一、出来ねエ時は地獄の釜の底からでも引摺出す覺悟だ、なアに宇野屋さん、無念も残念も人間らしい奴に對つての事さ、義理も人情も辨へねエ化物や獸物を相手にして大事の腹を立てなさんな、金さへ出来りやア叩き附けてやるが宜いしかも黙って、文句も絲瓜もいふだけ損だ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、おい誰か野郎は居ねエか、大急ぎで駕の用意しろ」

渡る世間に鬼はないとの諺あれど、今の我身にはいづこを見ても鬼ばかりなる世の中に、ただ一人の玉垣額之助、縁も由緒もなき此庄兵衛がため風邪の心地と打臥せし寢床より山の如き五體を軽く跳起きて、駕を飛ばすや否、其日の夕暮、立歸つて百兩の金と別に十五兩、合して百十五兩の小判さらに何の文句もなく差出しぬ、

庄兵衛おもはず聲をあけての男泣き、其百兩を幾度か押戴いて膝すり寄せながら「時も時、この御恩は親方、シ、死でも忘れません、いきて生あるうちには宇野屋庄兵衛、骨を粉に砕いても、きつと、必ず『いや、どんな方でも時と場合で金ばかりは力の外さ、ハ、ハ、ハ、ハ、しかし人様の御引立を蒙つて其日を送る我々風情が、此まを差上げると言ツちやア却て、なれど宇野屋さん、無理な事して御返濟なさるにも及びませんせ、實ア三四軒の旦那方から貰つて、

来た金だ、また其十五兩で、お可哀さうに、せめて娘御の衣類だけでも出してあげて下さい、この玉垣にも一疋の餓鬼があるから親心、お察し申しますよ、サアこれで宜し、此上もう何の御言葉にも及ばないこつた、早く歸つて其、その畜生面へ、うぬ叩き附けておやんなせエ

かよる時の常とて、平生は兄弟のやうに語り合ひし奴でさへ、今この塙の役にも立たぬ散々の文句を並べし上、さて金となれば一兩も出さまじき世の中に、あかの他人の玉垣が文句なしに百兩の金子、しかも娘がために十五兩まで添ての芳志なるほど、鬼をも挫ぐべき天下の力士幾百人を一言の下に取締るほどの男は格別、この恩義は此金を返した後も庄兵衛が一世一代の神佛ぞと、門口より振返つて伏拜みながら、ほつと溜息を吐て見上ぐれば、はや宵闇の空に星の光り高し、

不運の水底に落込で手も足も出ねばこそ、じつと堪へて男泣の涙を呑みしが、おのれ大和屋勘兵衛め、もはや此上は何の糞、その臭味より湧て出でたる蛆蟲に等しき横面へ、百六十兩の金を音するばかり叩き附けて、ついでに六軒の材木屋へも挨拶かたぐ、最後の歩を茅場町へ押向け、あの柏木が遁出せば差當つて軍師の太助にも一言、鷲が峰と幸庵坊主には出逢次第に冷笑の一ツも呉れてやらむと、其まよ深川の六間堀へ歩みかけしが、いや待て、またまた家には可愛の妻子と哀の戌松が、嘸や嘸、

親子三人が身の皮を剥で戌松が拜み出したる六十兩、懐中に入れしまよ立ち出でて今ごろ迄歸らねば、猶更ら今日の首尾を案じて我を待つは必定、わけて一時も早く玉垣が芳志の百兩を妻子が前に並べて喜ぶ顔も見たし、あの大和家めに今更ら何の理由あつて我より持参すべき、明日の朝、呼附けた上で渡してくれむと、俄かに足を早めて道を急ぎつよ、はや我家の

門口と心せくまよ小石に躓いて倒れかよりしが、軒の柱に身を突當てよ立止まりながら、懐中を探れば南無三寶、金はなし、金はなし、

秋の夜いつしか更渡りて、軒端を流しゆく按摩の笛の音も絶え、かすかに吠ゆる横町の犬の聲さへ睡た氣に、人は猶更ら夢うつとの肌心地、我にもあらず夜具引被りて前後も知らぬ頃ながら、あはれ浮世の憂節しみんと此家ばかりに宿りけむ、燈火の下に親子三人、わけて主人の庄兵衛は差俯いたるまよ、聲は出さねど五臟六腑を絞る一期の苦痛、はらくと落つる涙を拭ひもあへず妻は袖かみしめて娘の脊を撫でつよ、娘は父と母との中間に身を打伏して泣き沈みぬ、

「これが諺にいふ前世の業因か、そもく人間には定つた運命のあるものか、但しは持て生れた乃公が身の約束ごとか、ことし四十四の曉まで幾人となく人を助けた事はあつても、さて誰一人に迷惑をかけた覺えもなく、七年以前の丸焼に逢つてからは猶更ら、出直しの新世帯で苦勞の上の苦勞、夜を日について正直一方に働いて來たが、何の効もなくつて今この不運も不運、我ながら呆れて涙も出ないくらゐだ、しかし、事の原因は、あの柏木め、さしあつたての敵は大和屋め、それも此方に薄暗い理由でもあることか、彼奴の方から業を好んで義理も道理も踏み潰しながら、なほ飽き足らいでこの庄兵衛を散々、こよまで深いところへ突落した奴、もし獨身なら、生けて、生けて置くべき奴か畜生め、おのれと思つたが儲、さて此方に運のない悲しさは、親子三人が身の皮剥では戌松が拜み出した六十兩も、地獄で佛の玉垣が百兩、せめて娘の衣裳だけでもと、別に添てくれた十五兩の慈情まで、ひつくるめて百七十五兩を其まよ、しかも今この場合で、いはゞ男一代の大峠、生死の境に唯の一枚も

残らず、物の美事に落して仕舞つたとは、ざよ残念も無念も通り過ぎて、あゝ無効だ、もう不可、よく／＼前世で悪黨を働いて来た庄兵衛が現世での申譯、自然に巡つて来た罪亡し、これは全く因果の報酬だらうよ、ねエ、しかし、また彼奴等ア前世で、どれほどの善い事を仕て来た奴か、かくまで毒々しい罪を重ねながら手も足も曲らず満足に生伸びて、無事息災の朝夕、しやツ面に笑の浮ぶが不思議だ奇怪だ、いかにしても乃公の腑に落ちない、もう此上は男の絶體絶命、うぬツ

顔面は死毒を舐めたるが如く無念に迫る心の苦痛は熱鐵を呑むに等しき庄兵衛、あまりの果に涙も出ぬ大の眼を見張つても、はや白刃の業より外はなしとぞ思ひ切つたる體に、妻は猶更ら身も世もあられず、其まよ良人の手首に取附て泣音を震はしながら「なるほど、かうなつた上の夫婦は、たとひ夫婦は此まよ、どうなつても、しかし、お蝶が、娘を可愛と思つ

て、も一度こゝは辛抱して下さい、死だ氣になつて良人「いや、辛抱も堪忍も、するだけは仕て来た結句だ、よし死だ氣になつて此上また彼奴等に踏潰される覺悟でも、生きた氣で濟まぬは玉垣の手前だ、これほどの場合に迫つて血の涙から湧て出た金を、その本人の庄兵衛が、この四十四の男が、落して仕舞つたて濟むか、破れかぶれの捨鉢で柏木や大和屋奴に突出す面はあつても、あの玉垣に二度と再び合す顔がない「辛い筈、残念も残念、身を切るよりも辛いでせうが、今いふ通り死だ氣で大和屋へは良人が、其、その玉垣さんへは妾が、いへいへ妾が申譯に出ませう、もし萬一、萬々一それでも濟まない上は、ねエ良人、昔から世間にある事、お蝶に、娘に夫婦が手を合して頼みませう「えツ馬鹿、ばよ馬鹿な事いふな、親の口から」

七年以前の丸焼に逢ひし時、灰となつたる檜の借越を其場に責取られ、去年御船藏普請の入札ありし時、江戸中の材木屋満座の中にて辱しめられ、今年の夏には一人娘のお蝶を妾にせむとの色狂氣いづれも彼奴より義理人情を踏潰して、無念と怨恨は我にこそあるべきに、果は人しれぬ大仕掛の毒を流して此庄兵衛を斯くまで深いところへ落し込だる柏木め、まして戊松がためには怨死の父が仇なれど、今は何とせむ、おめく其柏木の術に乗つて殺さるゝかと思へば、

これほどの無念と怨恨を只の一度も報はず、却て其奴がために最後を刺さるゝのみか、地獄で佛と思ひし玉垣が慈情の金まで我身に添はず、親子三人が丸裸となりし六十兩もろともうつよか夢か一里に足らぬ歸途にて懐中より脱出すとは、さてもく不運の我、よくくの業因に生れついたる宇野屋庄兵衛、もはや生存て此上の恥辱を曝すも外聞の至極、さりとて妻

子ある身の血迷うて狼狽たといはれては猶更の無念、つまりは我一人の生命世にある甲斐もなしと、二階の隅に立籠つて、町人ながらも傳來の脇差一腰、そつと箆笥の底より取出さむとすれば、かねて此方に窺ふ戊松、飛鳥の如く走寄つて庄兵衛の手首に一生懸命、からみ附きぬ『だゝ旦那、何を、何を、何を、お探しなさいます、其、その箆笥は旦那、空虚、空虚の笥で』
 『戊松、この箆笥の底は叩いて質屋へ運んだが、たゞ一箇あるものが』もし、もし、脇差なら今朝細君が、どツかへ隠して仕舞つて、御座いませんよ旦那『むよ、秘した、むよさうか』
 『細君と嬢さんと、先刻、どツかへ、その間、もし旦那に妙な事があつちやア此、この戊松が、濟みませんから旦那、母子の、お歸りまで旦那』

二階の箆笥は底を叩いて塵も残さず質屋へ運びしが、たゞ残る一本の脇差、わけて斯る時は

荒立つべき男の心ごと、前夜のうちに人しれず秘せしが案に違はず今朝より引籠つたる良人の顔色、さてはと戊松を呼で委細を含めつよ、娘のお蝶を引連れながら涙と共に何處へか立ち去りぬ、

今は只こればかりと思ひ込だる生命の脇差、前夜のうちに妻が秘せしと聞て俄かに面目なく、戊松に諫められて猶更ら心の苦痛、やうく二階より降來りて火鉢の前に雙腕を組みながら、果は其まよ背後の壁に倒ると如く身を持たせて、無念に血走る眼を閉づれば、いかに忘れむとしても忘れぬ柏木傳右衛門、太助が手を拍て笑ふ面體、笑を含む鷲が峰、べろりと舌を出す幸庵坊主、おのれが上唇を舐めて額越に嘲ける大和屋勘兵衛が五十面まで、ありくく目に見えて、五臟六腑を引裂かるよ悲嘆に、いつしか庄兵衛またもや齒を嚙鳴して居直れば、涙ながらに茶を汲で出す戊松の慘愴さ、これも今は生きて浮世の怨恨なり、

折しも歸り來りし女房たど一人、良人の顔を見るより其まよ其處に身を伏して、わつと泣叫びながら、胸帯の間より取出したる金子二百兩『もし良人、これが、この二百兩は、お蝶が拵へてくれた親孝行のお金、其、その孝行さした妾が悪ければ、叩かれても、打たれても』庄兵衛おもはず兩眼くわつと見開きしが、無言のまよの涙、はらくくと流しぬ、
戊松は店頭へ飛出して残れる材木の間に首を差入れ兩手を顔に押當てながら、おいくと聲をあけて泣きぬ、

驕る平家は久しからぬ世の凡例、やがて壽永の秋の濱風に散行く夢の曉とて、土佐が晝ける屋島壇の浦の名物屏風はありながら、今は豊坂登る日出の勢ひにまかして、傾く身代の夕陽前を知らねば、其日々の夕暮を自己一人の酒池肉林とせる柏木傳右衛門、美人の膝も轉寝

の枕に飽て、奥の茶室に入りつと酔醒の服に舌鼓を打つ折しも、例の太助そつと入り来りぬ、

『むと太助か、宜いところへ来た、酒の後は茶に限るよ、さア汝も一服』『こりやア恐れ入ります、旦那様のお手前ていやまた格別の風味、お加減は宗匠跣足で御座います』『ハ、、、、とかく世の中の奴は酒氣があつても茶氣がなし、茶のあるものは酒がなくつて、どうも話せない奴ばかりだが、汝は兩刀使ひだから面白い、いや面白いついでに例の一件、其後どうした、汝のこつたから如才なく、うまく遣つたらうな』何事も旦那様の御威光で、別段この太助が働いた理由では御座いませんが、平井新田の松丸太四千本を一々に抜取りました後は、萬事まるで赤ん坊の細首に繩をからけて引摺引廻すも同然、ハ、、、、流石に胴骨の死太い宇野庄も今では墓場と壁一重の悲境、夜晝ともに男泣の泣きつゞけて、きのふの朝、ちよい

と餘所ながら見ましたところがなるほど人間は其日々々の食物よりも快樂と苦勞の器物、恐ろしいもんで、ぐつと俄かに瘦せましたな、頭髮を結ぶ氣にもならず鬢が亂れて鬚髯ほうほうと青ざめた顔色、もはや現世の人ぢやア御座いませんよ、しかし松丸太抜取の一件後は差當つて大和屋勘兵衛の鬼役、近々の中何か一褒美お遣り遊ばさないといけません、彼奴も根は慾面の厚皮で、この太助が指人形となつて一生懸命に働きましたもの、腹の空加減では何をやるやら性根の定らぬ奴、兎角かやうの事を致す間は味方の酔の醒めない工夫が專一で御座います』眞實だ、しかし大和屋は乃公の息を外れて其日から商賣の出来ない奴、また今度の一件に就て早速褒美も遣らうが、をりく思ひ出して薄氣味の悪いのは四千本の抜取一件だ、あんまり汝の度胸が太過ぎて手際が立派すぎたぞけ猶更ら、もしこれが露顯でもした暁は太助、家と身にかよるこつたからな、しかも宇野庄め、すぐ奉行所へ届けてあるといふ

ぢやアないか「ハ、ハ、ハ、一應は御道理で御座いますが、その邊の御心配は御無用、憚りながら太助が一身に引受けて居りますから「いや、乃公も安心はして居るがね、もし萬一の事があるかと思つてさ」なアに貴方世の中の闇魔の聲でも地獄の釜でも小判で買取れます、まして僥倖あの時は槍を積込で来た尾州の親船三艘、空虚で歸るところを利慾の綱で引止めて、四千本の丸太へ四千本の時の相場の金を添て、雲と水との海上を夜明の追風で走りまして以上、どうして露顯いたしますものか、船脚が輕過ぎて石でも積込まうといふところへ品物が無價で金は正金で受取て行く奴、第一うぬ等が頭上にかゝる事ですもの、ハ、ハ、ハ、大丈夫、鐵の草鞋で御座います、もし萬一、萬々一、俄かに雲行が變つたところで、柏木傳右衛門は一切さらに存せぬ事、手代の太助が張本人、俎のうへで未練らしい尾緒を動かす太助では御座いません「や、男魚、鯉だ、と、ところで宇野庄、結局どうなるだらう」どう斯うといふ

は二三日前の事、もはや昨今のところでは生死の境で御座います、しかも大和屋勘兵衛、おのれが何の意地も仔細もないにして無慈悲の段では前途不見の猪武者、庄兵衛の五臟六腑を咬へ出すは必定で御座います「む、庄兵衛の臟腑を咬へ出すとは太助、どうして「首を吊るか水へ飛込むか血迷うて刃物三昧するほどの勢ひも御座いますまい、また生きて居る以上は娘お蝶、いよく愁歎の出幕に相成ります、その時こそは表の木戸を打て棧敷も土間も一手の買潰しで、いかやうの御見物なさらうとも御意のまよ、ハ、ハ、ハ、ハ、いかどで御座います、聊か太助の庖刀加減一言なし、ハ、ハ、ハ、ハ、出來たく、案外うまく出來たぞさア、もう一息だ」

柏木傳右衛門、酔醒の抹茶に腹加減を整へて得もいはれぬ心地、ほつとせしところを、太助

が策略の成就あの宇野庄が生死の境と聞くや否、宛がら小兒の如く喜び勇んで數寄屋を走出でつゝ、奥の座敷に飛込みながら、さア酒だ、あらためて飲直さう、いや飲明さうとぞ騒ぎ立てぬ、

盃の相手は軍師の太助と飼殺しの鷲が峰、まづ今夜だけは女ども一切禁制、ついでに大和屋勘兵衛も呼びにやれ、彼奴も時に取って働いた男と噂の折柄、其勘兵衛が何の用か只今これへ伺ひましたとの取次口上、やア運の善い奴、それ呼入れよといふまもなく入來るを見れば、何とやら打沈んで鬼の首を取損ねたる顔色、例の上唇を舐めて額越に微笑を含む勇氣もなし、

「やア大和屋、よいところへ來た、兎も角も飲めだが、さて浮かぬ調子、見定めた雲行でも俄かに變つたかな、これは旦那、太助さん、關取、いづれもで幸ひの席上、實は先刻、あの宇野庄めが私方へまゐりまして、百六十兩耳を揃へました、御承知の通り内證いづも北山風で、びい／＼風の吹拔身代、よし春の花にしたところが彼奴の世界五兩十兩の蒼金は兎も角、くわつと一時に百兩以上の満開は逆もの事、わけて今度の一件に度膽を失つて思案の果に差迫つた結句、死か生るかと高を括つて居りました鼻頭へ、案外にも先刻いづれ、仔細のある金とは存じますが、もはや責道具のない以上は一筋縄でゆかぬ奴、うかく、大和屋が飛込んで組付かうより、こゝは太助さんに是非とも次狂言の御指圖を願ひたい、むと百六十兩、耳を揃へて、あの宇野庄が、なるほど、こりやア少々雲行が變だぞ、おい太助、また汝の量見が要用だ、さア、どういふもんか考へてくれ、ハ、ハ、ハ、この御大家に生れついた旦那は兎も角、どうしたもんだよ大和屋さん、さう胸裡の底が淺くツちやア困るね、たとひ次狂言を仕組でも舞臺面が覺束ない、關取、その腕力で大和屋の脊骨が折れるほど、ハ、ハ、ハ、ぶツて

しめた、しめ子の兎、人手にかゝらぬうち網を張れ』

柏木の奥座敷には主人の傳右衛門を始めとして一味の徒輩、いづれも酒宴の最中に半田幸庵が注進を聞くや否、満座わつと中腰になつて思はず手を拍ちながら、占めた／＼と立騒いで夜明しの全盛を極めしに引替へ、あはれ占められたる宇野屋庄兵衛は人間不運の頂上、人しれぬ夜明しの血の涙を絞りぬ、

良人が生死の境と思へばこそ、妻は心を鬼にして娘を賣り、父が一世一代の恥辱と思へばこそ、娘も母に従うて賣られしかど、庄兵衛の身に取つては五體の骨節を碎かるよの心地、これがお蝶かとその二百兩に喰ひ附いて泣きぬ、

されど此金なくば死すべき筈の我、我ごとく死せば路頭に迷ふべき筈の妻子、まして柏木がために娘を賣ると思へば眼前に十千萬兩を積まれても口惜けれど、あかの他人の我に親身も及ばぬ玉垣への申譯と思へば、かくなるも浮世の常と諦めて、やう／＼弱る心を取直しながら、取直しても諦められぬは柏木傳右衛門め、今は猶更ら無念も怨恨も百層倍の膈、搔奪らるよが如し、

大和屋勘兵衛の横面に叩き附けたる百六十兩、あまりし四十兩を一丈たりとも親甲斐なき夫婦が身につけては冥加、おそろしと娘が衣裳飾具を質屋より請出し、なほ見ず知らずの人中わけて朋輩に憎まれぬ手土産まで整へて、涙ながら深川の仲町へ出行く妻が後姿、庄兵衛も涙ながらに見送りて奥へ入れば、成松たゞ一人、しよんほりと物の悲哀を含んで片隅に座しぬ、

「戌松、今の間に湯へでも這入ッて来ないか、可哀さうに、過日中は、しかし堪忍してくれ、よ、あゝ有難う御座いますが、湯は、晩にいたゞきます、私より旦那、貴方が今のうち、いや乃公は少々風氣もあるから、まだ這入れない、時に戌松、ちよいと此處へ来てくれ、何の御用で御座います、外でもないがね、さて段々と汝にまで心配かけた今度の一件、やうやうお蝶の親孝行で、どうか斯うか眼前の急場だけは切抜けたもの、さアこれからが猶更また一倍の骨だ、早い話談が平井新田から最初の相談を持込で来たのが菊の親父だ其菊めが、かういふ騒動になるや否、すぐ逃出した所を見ると、やはり父子とも臭い奴等だ、しかし幸ひ此後は下女も不用で、夫婦共稼ぎの覺悟、第一が我子でも親甲斐のないため身を賣ッた娘へ對して、一時も早く、二百兩といふ金を、ね、またお蝶が藝妓になつたと聞きやアあの色狂氣の柏木め、まして賣物買物は金次第と吐して追廻すは必定、なれど、親の仇敵といふ理

由を飽迄言ひ含めて置いたから、まさか生命にかけても彼奴の餌食にはなるまい、そこで柏木奴いよく業を拂かして、その毒矢が此方へ来る筈、つまり江戸中の材木屋を唆かして此庄兵衛に一切の取引を絶ち、いはゞ遠卷の兵糧攻で、しかし戌松、この江戸は日本一の八百八町、もし新しい材木が手廻らずば建毀しの古材木を買集めて、洗ひ出し削り直しの二番三番物を賣ッても家業になるから、過日すでに死だ筈の庄兵衛、二度の死物狂ひで日夜一生懸命、まッ黒になツて働く覺悟だが儲かういふ不運の底に落込で死物狂ひの主人を持た汝が可哀さうだ、氣の毒だ、まして年齢は十四でも世間普通の十七八よりは遙かに立勝ッた天性、運の開いた繁昌の店で奉公すりやア、乃公の家で辛抱する十分一で立派に出世も出来るから、ねエ戌松、これまでの縁と諦めて、實は残念だが、惜しいが、乃公は行末の片腕を取られる理由だが、夕暮の薄闇に旭日の汝を抱込むのが堪らない、こゝは汝が生涯の分別時だ、乃公

が親元となつて、材木屋に限らず、どツか見込みのある店へでも「たゞ旦那、私に出て行け」と仰しやるんですか、此戌松を旦那、追出しなさるんですか「いや、いや」決して戌松、そと然う取てくれちやア乃公が、乃公の立場がない、さら／＼さういふ理由でない、たゞ汝の身を思つて、龜島町に汝の出世を待て居る一人の母親に對して、いかにも濟まない、申譯がないからさ「たとひ何と、何と仰しやつても私は此、此お家を動きません、あの柏木がある以上、此お家を、旦那、どうか今まで通り置いて下さい、もし旦那が古材木を商賣になさる時この戌松は夜晝、市中を駈廻つて、きよ木拾ひ仕ても働きますから「おと戌松、よく言つてくれた、何が今更ら、汝を出したいもんか、實ア、實のところ乃公が心の邪推だ、汝が其量見で居てくれるなら戌松、改めて言聞す事がある、外でもないが戌松、娘お蝶、もし無事で、無疵で、藝妓こそすれ清淨無垢で歸つて来た時は、汝の女房に持てくれ、と、二歳も年

上で、今いふこつてもないが、さて今から約束して置きたいのだ、また宇野屋の名を嗣で、れとはいはない、たゞ娘と夫婦になつて、うみの父が怨死の仇敵、主人なり舅の庄兵衛が無念の仇敵、いはゞ連添ふ妻の身に取ても仇敵だ、あの柏木奴を戌松、頼むぞよ頼まれなくつても大丈夫の汝に重ねて頼むのだ、この乃公は、こよまで不運に生れついて来たから萬事も不可、たとひ死物狂に働いても敵の毒矢を防ぐばかり、逆も彼奴を仕止める事は出来まいから、戌松、汝に頼んだぞ、確乎、やつてくれ」

入相の鐘に花は散れど夕暮の空に萬燈の光り輝いて、戀の攔取り色の水上といふ吉原に引替の別世界、近き頃より情の深川こよぞ浮世の仲間三味の音じめ床しく、戀は枕に添はねど色香は酒に浮れの調子、駕よりも舟で行く岸本家に小蝶と名乗出たる名玉の風聞、ぱつと

江戸中に立ちて人の心を動かさぬ、

さア深川の仲町に刃物なしの男殺しが現はれたぞ年は十六、まだ招聘の酒席には出さねど、岸本家が馴染の客の給仕には下稽古のため、いよく本極りは十七の春から一蓮託生の情致、誰彼なしの酌に出すとの事、ならば手柄に殺されて見たいとて、戀には死装束の晴衣裳を着飾つて魂魄は脱殻ながら懐中へ小判を詰込みつと、あけての春を武者振ひに待つもの多し、されば岸本家も猶更らの珍重、これまで親の手鹽に育ちて世間知らずの初心ながら、元來の器用に生れついて物事に惻憐の立振舞、遊藝も普通の下地ありて加之も上乘の手筋と自然の美音、わけて目元に男殺しの本性を備へ、おのづから容姿に色香を含んで静閑なれど根は野暮ならず、愛嬌あれど身は驕がしからず、鼻筋と唇端に歌舞伎の若衆めいたるところは取も直さず心の底の一物、これを打て叩いて皮一枚の下まで吹出せば、それこそ教へて叶はぬ意

氣地の張も持つべし、やがては我家に金が呻つて仲町の舞臺を振廻すべき名玉ぞと俄かに内證を傾けて朝夕の美衣美食に飽かせ、名ある藝人を招いて絶間なく仕込みぬ、

さらぬも珠玉は珠玉、天性の美人に生れついたりお蝶が、朝夕その道の手絶間なく磨かれ、日夜その道の藝に飽まで仕込まれしかばわづか二月か三月の後には自然の名玉こゝに人間あらゆる錦繡を飾りて、十七の春や春、半面に笑渦の露を湛へつと半面に我身の恥かしさを忍んで、すらりと押出せし時は見るもの思はず目を時てよ人殺しと叫びぬ、

去年の暮から評判のあつた男殺し人殺し、さア岸本の小蝶が出たとて、立騒ぐ噂を聞きし時は、父の庄兵衛おもはず深川仲町の方角に兩手を合しながら、ともに咽入る妻を見返りて男泣の涙を流しつと『親に甲斐性ないため、夫婦が間の一人娘を商賣往來にもない家業に落して仕舞つた、氏なくして玉の輿沈んでこそ浮ぶ瀬もあると自己が勝手の理窟を附けて娘の全

盛を誇る奴の目からは、この風評を聞いて喜びもしやうが、宇野屋庄兵衛まだ、其處まで心の腐らない以上、みよ身を切られるやうだ、しかし今更ら泣いても喚いても及ばないこと、此上は一日も早く無事に請出す工夫が肝要、それには金、まッ黒になつて夫婦の働くのが、せめて娘への申譯だ、また乃公は男その金を持って迎ひに行くまで逢はれないが、汝は母親のこつてもあり、お蝶も定めて顔が見たからうからそつと今夜でも逢つて来るが宜い、しかし長居は無用だぜ、互ひの爲にならないから、いふまでもないが身體を大事にして大人しく辛抱しろと言つてくれ、無理酒を飲み習つて煩はないやう、呉々も言ひ聞かして来いよ、序に横町の菓子屋で例の蒸羊羹を、ありやアお蝶が幼少い時から好物だったよ、ねエ、可哀さうに」

「それでは今夜、ちよいと逢つて来ますから、併し悲しい事は悲しいがあの子が立派に、お粧飾をして出たところは良人どんなでせう」ばよ馬鹿な事いふない、其、その立派な見せも

ンには誰が仕たんだ」

斯道開山の明石志賀之助は儲置き、今は伊達様様の小歌に唄はるゝ谷風梶之助の氣風ありとて、樽太鼓の音高く男家業の水立と立てらるゝ玉垣額之助、責めらるゝ相手よりも我への申譯に庄兵衛が娘を賣りしと聞くや否、はッと思はず舌鼓を打て膝を乗出せしが、甥娘は金に代へたる後のこと、深く見えても年中あればあるだけ底の浅い家業に今其金もなしと、例の無言に首肯いたる儘打ち過せしが、心のうちには柏木への手前も何とやら面白からず、我息の下より脱出したる鷺が峯には猶更ら後を振返らるゝ心地して、おのれ此まよにはと兩の拳を握りぬ、

さればお蝶が十七の春、額之助みづから深川の仲町へ行きて、幸ひ岸本の主人とは知合の間

柄、また宇野屋庄兵衛にも本人のため後日のためと人しらす萬事の委細を言含めて後、いよ
 いよ小蝶を玉垣額之助が娘分として打出しぬ、
 現在あの小蝶は北新堀の宇野庄が娘、金に詰った涙の塊物とは知れど、天下の力士を取締る
 玉垣額之助が娘との觸込を聞いて、いづれも思はず手を拍ちながら、なるほど商賣は道に依て
 賢し、岸本の主人奴うまいところへ氣が附たぞ、あれほどの瓊珠を尋常の掘出物といふより
 は、日本國に鳴響いて名も面も廣い玉垣が娘とは、鬼に金棒、錦に花、賣物に金箔の厚化粧、
 親の名で歴々の席にも呼ばれ親の顔で馴染の客筋にも招かれ、また一事には如何に鐵火の惡
 黨も毛脛を出しかね、惡い蟲さへ恐れて寄附かぬための要害堅固、うかく、近附て張殺され
 むより金のないうち當分は拜んで置いとぞ笑ひぬ、

あの宇野庄め身代の細い割には度膽の太い奴、連も一筋二筋ではのくまいと思ひしが、平井
 新田の一件以來、ばたくと俄かに往生せしのみか、兼て狙ひし娘を賣りしと聞くより、柏
 木が一味の徒輩おもはず手を拍て、しめたぞ、もはや我物、それ金網を張れとの勢ひに、
 はッと答へて半田幸庵が深川仲町の岸本家へ飛込みつと、さア福の神の先觸に來た大判か小
 判か望み次第と掛合ひしが、いかな御大家でも土地の習慣とて今は差上難し、わけて内證子
 飼のうちに賣値は仕らずといはれて、赤光りの坊主頭を抱へながら逃歸りしかば、傳右衛門
 なほさら鏡花水月の戀情に、一日千秋の地團太を踏みぬ、
 されば十七の春に小蝶が押出せしと聞くや否、不俱戴天の親の仇敵を見付出せしが如く、盾
 も矢も堪らず待兼ねたる戀の武者振ひ、自己が臂に扇子の鞭を當てよ起たむとするを、例の
 太助、そツと其の袖を控へながら『もし旦那、うかと掛れませんぜ、賣物買物とは申しなが